

アメリカ家族研究における 相互作用적アプローチ

野々山久也

1. はじめに

アメリカにおける家族の研究を概観して1957年の時点において R. ヒルらは、これまでにほぼ次のような7つの概念枠組ないしはアプローチを確認することができるとして整理している。¹⁾ すなわち、それらは (1)相互作用적アプローチ, (2)構造・機能的アプローチ, (3)状況的アプローチ, (4)制度的アプローチ, (5)発達的アプローチ, (6)学習理論的アプローチ, (7)消費経済学的アプローチの合計7つのアプローチである。

R. ヒルは、1960年には D. A. ハンセンとの共著論文において、うゑに述べた7つの分類のうち学習理論的アプローチと消費経済学的アプローチの2つを取り除くことによって、さらに整理して次のような5つのアプローチを確認することができるとして結論づけている。²⁾ すなわち、それらは(1)相互作用적アプローチ, (2)構造・機能的アプローチ, (3)状況的アプローチ, (4)制度的アプローチ, (5)発達的アプローチの合計5つのアプローチである。言うまでもなく、ヒルによるこれまでの家族研究における概念枠組ないしはア

1) R. Hill, A. M. Katz and R. L. Simpson, "A Inventory of Research in Marriage and Family Behavior: A Statement of Objectives and Progress," *Marriage and Family Living*, Vol. 19 (February 1957), pp. 89-92.

2) R. Hill and D. A. Hansen, "The Identification of Conceptual Frameworks Utilized in Family Study," *Marriage and Family Living*, Vol. 22, No. 4, 1960, pp. 299-311.

ローチの整理は、この第5番目に位置づけられた「発達的アプローチ」、すなわち家族周期論的視点の導入の家族研究における重要性と不可欠性を強調するためのものであった。

こうした分類に触発されて、このあと今日にいたるまでにアメリカ家族研究についてのいくつかの概念枠組ないしはアプローチの整理が続出することになった。

まず1964年には、H. T. クリステンセンがそれらを8つに整理できることを確認している。³⁾ すなわち、それらは (1)制度的アプローチ、(2)構造・機能的アプローチ、(3)相互作用的アプローチ、(4)状況的アプローチ、(5)発達的アプローチ、(6)家政学・家庭管理学的アプローチ、(7)学習理論・成熟論的アプローチ、(8)精神分析的アプローチの合計8つのアプローチである。クリステンセンは、これらのうちヒルらの分類した前半の5つのアプローチを社会的アプローチとし、後半の3つのアプローチを周辺的アプローチとして位置づけている。

1966年には、F. I. ナイと F. M. ベラードがその他の人びとの分類によるアプローチの数に比較して、もっとも多くのアプローチを確認し、次のような11のアプローチを整理している。⁴⁾ すなわち、それらは (1)文化人類学的アプローチ、(2)構造・機能的アプローチ、(3)制度的アプローチ、(4)相互作用的アプローチ、(5)状況的アプローチ、(6)精神分析的アプローチ、(7)社会心理学的アプローチ、(8)発達的アプローチ、(9)経済的アプローチ、(10)法律のアプローチ、(11)西洋キリスト教的アプローチの合計11のアプローチである。

1971年には、C. B. ブロデリックが純粋に社会的アプローチのみに限定して合計9つのアプローチを整理している。⁵⁾ すなわち、それらは、まずヒ

3) H. T. Christensen, "Development of the Family Field of Study," in H. T. Christensen (ed.), *Handbook of Marriage and the Family*, Rand McNally, 1964, pp. 3-32.

4) F. I. Nye and F. M. Berardo, "Introduction," in Nye and Berardo (eds.), *Emerging Conceptual Frameworks in Family Analysis*, Macmillan, 1966, pp. 1-9.

5) C. B. Broderick, "Beyond the Five Conceptual Frameworks: A Decade of De-

ルどハンセンの1960年の分類による5つのアプローチ、つまり (1)相互作用
的アプローチ、(2)構造・機能的アプローチ、(3)状況的アプローチ、(4)制度的
アプローチ、(5)発達の的アプローチと、さらに次の4つのアプローチ、つまり
(6)バランス理論的アプローチ、(7)ゲーム理論的アプローチ、(8)交換理論的ア
プローチ、(9)一般システム理論的アプローチの合計9つのアプローチである。
ブロデリックは、ヒルらの5つの分類を乗り越えた新しい社会学的アプロ
ーチの位置づけを試みようとしたのであった。

1979年には、W. R. バアらがこれまでの人びとの整理とはまったく異なる
新しい分類を試みている。⁶⁾ これらの分類は次のような5つのアプローチで
ある。すなわち、それらは (1)交換理論的アプローチ、(2)シンボリック相互
作用論的アプローチ、(3)一般システム理論的アプローチ、(4)コンフリクト理
論的アプローチ、(5)現象学的アプローチの合計5つのアプローチである。バ
アらの分類は、これまでのアメリカの家族研究に見いだされる概念枠組ない
しはアプローチの分類というよりも、むしろ家族研究に應用されるべき現代
社会学における主要な接近方法という意味においての整理あるいは位置づけ
としての分類である。

以上に紹介したいくつかの分類をもう一度眺め直してみると、ほんの1つ
のアプローチを除いて、どの分類にも一貫して見いだされるアプローチは皆
無であることが分かる。結局のところ、アメリカの家族研究において一貫し
て用いられてきているアプローチは、ほんの1つだけということになりそう
である。言うまでもなく、そのアプローチとは「相互作用的アプローチ」で
ある。バアらは、それを上述のように「シンボリック相互作用論的アプロ
ーチ」という名称で整理している。

velopment in Family Theory," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 33, No. 1, 1971, pp. 139-159.

6) W. R. Burr et al. (eds.), *Contemporary Theories About The Family*, Vol. II, The Free Press, 1979.

すでに S. ストライカーは、「社会学そのものは相互作用およびその産物を研究する学問であるが、しかし相互作用的アプローチとは、こうした包括的な意味ではなく、役割理論やシンボリック相互作用理論に限定して用いられている」と定義している。⁷⁾ 相互作用的アプローチがシンボリック相互作用論的アプローチと同一であると見なすことは、まったく正しいし、のちに紹介するように明らかにヒルらの分類している相互作用的アプローチの概念枠組も、まさにシンボリック相互作用論的概念枠組そのものにはかならないのである。⁸⁾ こうしたことから理解されることは、今日、相互作用的アプローチとはアメリカ家族研究において、むしろその研究にとっての当たりまえの前提となっているような概念枠組であり、またアメリカにおける家族研究のための基本的なアプローチであるということになるのである。

そしてまた、すでにヒルらは、アメリカにおいてこの間にシンボリック相互作用の枠組によって何百もの家族研究が刺激されたと述べてきており (Hill and Hansen, *Op. Cit.*, 1960, pp. 299-311.), クリステンセンは、相互作用的枠組は20世紀のアメリカにおける家族研究のもっとも顕著な特徴であると述べている (H. T. Christensen, *Op. Cit.*, 1964, pp. 3-32)。そしてシュベインベルトは、相互作用的アプローチは家族研究を思索の範囲から科学的研究ならびに分析の分野に移すのに、その他のいかなるアプローチよりも多くのことをなしてきたと述べているのである (J. D. Schvaneveldt, *Op. Cit.*, 1966, pp. 97-129.)。

そこで、この小論ではアメリカ家族研究における相互作用的アプローチの

7) Sheldon Stryker, "The Interactional and Situational Approaches," in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

8) J. D. シュベインベルトは、調査研究の文献においては「相互作用」と「シンボリック相互作用」は相互に交換可能な概念として用いられているとし、どちらかということ社会学者は「相互作用」を用い、社会心理学者は「シンボリック相互作用」を用いて、それぞれ同一のことを強調していると指摘している。(J. D. Schvaneveldt, "The Interactional Framework in the Study of the Family," in Nye and Berardo (eds.), *Op. Cit.*, 1966, p. 101.)

展開を多少なりとも紐といてみることにしてみたい。

2. 諸アプローチの概念枠組と仮定

アメリカ家族研究における相互作用的アプローチを浮きぼりにするために、この節では、まずその他の諸アプローチの概念枠組や仮定を簡単に整理しておくことにしてみたい。この作業は、相互作用的アプローチがその他のアプローチとどのように異なるかを理解するのに不可欠な作業であるといってい

いだろう。

とはいっても、ここで既存のアプローチのすべてを論述することは、とうてい不可能である。「状況的アプローチ」については、すでにストライカーが指摘してきているように、⁹⁾ 家族社会学者のすべてがそれなりに研究してきていることであって、とくに状況的枠組として強調する必要はなく、基本的仮定や概念あるいは方法論においては歴史的起源という点からしてシンボリック相互作用理論と同一であって、あえて独立に取りあげる必要はないのである。また「制度的アプローチ」については、すでに J. サージャマキも P. D. バーディスもともに指摘してきているように、とくに1つの概念枠組としての体裁をなしてきておらず、いわゆる制度的アプローチとして採用されてきている諸概念のほとんどは、構造・機能的アプローチのそれらと何ら変わるところがないのである。¹⁰⁾

そして J.F. クラインらは、1962年から1968年のあいだの12のジャーナルの合計600の論文を調べたところ、1960年にヒルとハンセンが5つのアプローチの整理を行なって以来、アメリカにおける家族研究においては、事実として

9) Sheldon Stryker, "The Interactional and Situational Approaches" in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

10) John Sirjamaki, "The Institutional Approach", in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 33-50.

P. D. Bardis, "Family Forms and Variations Historically Considered," in H. T. Christensen (ed.), *Ibid.*, 1964, pp. 403-461.

相互作用的アプローチと構造・機能的アプローチと発達的アプローチの3つのアプローチだけが継続して研究に採用されてきているだけであることを見いだしているのである。¹¹⁾ 要するに、状況的アプローチも制度的アプローチも、この間においてはまったく見いだすことができなかつたというのである。

ところが、この3つのアプローチのうちのとくにヒルがその重要性を強調する「発達的アプローチ」にしても、バアは、次のように指摘してきているのである。¹²⁾ すなわちバアによれば、家族周期という変数は複数の変数の組合わさった複合体であつて、諸変数の複合化したものにしかすぎなく、その組成変数である家族員数、年齢構成、就業状態などといった単独変数に分解して、それぞれを別べつに分析したほうが有益であるというのである。このことは家族ライフ・サイクルという概念そのものの否定というよりも、発達的アプローチが独立した概念枠組ないしは固有のアプローチとして社会学的な一般理論というほどの体裁をなしてはいないということである。状況的アプローチや制度的アプローチと同じように発達的アプローチも、結局のところ、固有の概念や仮定あるいは方法論が整っていないというわけである。

さて、そこである程度は一般的理論あるいは一般的モデルとして概念枠組ないしはアプローチが体裁を整えていると思われるもののみについて、ここでその基本的概念ならびに基本的仮定をいくらかなりとも提示してみることにしてみたい。このことはのちに述べることになる相互作用的アプローチとの比較をより容易にするためのものにほかならない。

まず「構造・機能的アプローチ」から考察してみたい。¹³⁾ このアプローチ

11) J. F. Klein, et al., "Pilgrim's Progress I: Recent Developments in Family Theory," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 31, No. 4, 1969, pp. 677-687.

12) W. R. Burr, *Theory Construction and The Sociology of The Family*, Wiley, 1973, p. 233.

13) このアプローチについては主として次を参照。

R. Hill and D. A. Hansen, "Identification of Conceptual Frameworks Utilized in Family," *Marriage and the Family Living*, Vol. 22, No. 4, 1960, pp. 299-311.

C. B. Broderick and J. Smith, "The General Systems Approach," in W. R. Burr

は W. R. バアらの分類してきている一般システム理論的アプローチをその延長線上に展開してきているもの (J. H. Turner, *The Structure of Sociological Theory*, 3rd ed., Dorsey, 1982) であって、その基本的概念は、すでに極めて多数のものが開発されてきている。そのほんの一部を紹介しただけで、それと明らかに判明できるものが多い。例えば、社会体系、社会的下位体系、社会的構造、社会的機能、産出、産入、境界維持、均衡、パターン維持、緊張処理、等々である。

基本的仮定も、明らかにそれと確認できるものばかりである。そのいくらかを提示してみると次のとおりである。すなわち、(1)社会的行為は、社会体系の維持に貢献するものとしてもっとも適切に分析される。(2)人間は、基本的に社会体系の反応する部分である。(3)基本的な自律的単位は、相互依存しあっている諸下位体系からなる社会体系である。(4)社会体系は、恒常性維持 (homeostasis) の傾向がある。等々である。

つぎに、クリステンセンやナイおよびベラードらによる分類のなかに位置づけられている「精神分析的アプローチ」について考察してみたい。¹⁴⁾ このアプローチも、すでに極めて多くの固有の基本的概念を開発してきている。そのほんの一部を紹介しただけで、それと明らかに判明できるものが多い。例えば、無意識、イド、自我、超自我、防衛機制、リビドー、エディプス・コンプレックス、固着、退行、反動形成、口唇期、肛門期、等々である。

基本的仮定も、明らかにそれと確認できるものばかりである。そのいくらかを提示してみると次のとおりである。すなわち、(1)人間は、生来的に反社会的 (anti-social) であって、人間の生まれ込む世界は、かれの本能的願望

et al. (eds.), *Contemporary Theories About The Family*, Vol. II, Free Press, 1979, pp. 112-129.

14) このアプローチについては主として次を参照。

A. E. Bayer, "The Psychoanalytic Frame of Reference in Family Study," in Nye and Berardo (eds.), *Op. Cit.*, 1966, pp. 152-175,

J. C. Flügel, *A Psychoanalytic Study of the Family*, Wolff, 1926.

にとって基本的に敵対的である。(2)パーソナリティは先天的ではなく、その個人の幼児期における家族での経験の産物である。(3)すべての行動は、イドから生じるエネルギーに由来する。(4)文化は、イドのエネルギーの昇華的産物である。等々である。

つぎに、バアラが分類している「コンフリクト理論的アプローチ」あるいは「闘争モデル的アプローチ」について考察してみたい。¹⁵⁾ このアプローチは、近年になってアメリカの家族研究にしばしば登場するようになったもので、もちろん社会的相互作用の1つである「葛藤」をその研究の焦点に置いている。基本的概念も、それなりに固有のものがすでにいくつか開発されてきている。例えば、コンフリクト（闘争、葛藤）、競争、交渉、掛引き、搾取、勢力、攻撃、脅威、等々である。

また基本的仮定も、明らかにそれと確認できる固有の仮定が設定されている。そのいくらかを提示してみると次のとおりである。すなわち、(1)コンフリクトは、ほとんどの成長と発展にとって不可欠な条件である。(2)人間社会は、生来的な不平等な要素から成り立っている。(3)社会は、種の生存に関する組織化されたシステムである。等々である。

つぎに、ブロデリックもバアラもその分類のなかに位置づけている「交換理論的アプローチ」あるいは「交換モデル的アプローチ」について考察してみたい。¹⁶⁾ このアプローチも、いくつかの固有の基本的概念を開発してきて

15) このアプローチについては主として次を参照。

Jetse Sprey, "Conflict Theory and the Study of Marriage and the Family," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, pp. 130-159.

H. L. Raush et al., *Communication, Conflict and Marriage*, Jossey-Bass, 1974.

R. LaRossa, *Conflict and Power in Marriage: Expecting The First Child*, Sage Publications, 1977.

16) このアプローチについては主として次を参照。

F. I. Nye, "Choice, Exchange and the Family," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, pp. 1-41.

Willard Waller, *The Family: A Dynamic Interpretation*, The Dryden Press, 1938.

J. N. Edwards, "Familial Behavior as Social Exchange," *Journal of Marriage and The Family*, Vol. 31, 1969. pp. 518-526.

いる。例えば、報酬、利益、利得、代価、交換、選択、等々である。そして、基本的仮定についても、明らかにそれと確認できるものを設定している。それらのいくらかを提示してみると次のとおりである。すなわち、(1)人間は、合理的存在である。(2)相互作用における対象は、客観的な価値を有している。(3)人間は、つねに継続的に利益を求めている存在である。等々である。

ところで、「相互作用的アプローチ」にとって、構造・機能的アプローチの基本的仮定は、おそらくほとんど当然の前提であって、抵触するものは、それほど多くないといつてもよいかもしれない。しかし根本的に異なるところは、さきに例示した第3番目の仮定だろう。構造・機能的アプローチが個人よりも「社会体系」を自律的単位として見なしているのにたいして、相互作用的アプローチは、あくまで「個人」を自律的単位と見なしているのである。

では、精神分析的アプローチの基本的仮定についてはどうだろうか。このアプローチとは、いくつかの点で根本的に異なっているといつてもよいだろう。まず、このアプローチが無意識の過程を重視するのにたいして、相互作用的アプローチは意識的ならびに主観的過程を重視するのである。また先の例示の第1番目の基本的仮定におけるように、このアプローチでは人間を出生時において基本的に反社会的存在と見なしているが、相互作用的アプローチでは、むしろ非社会的 (asocial) な存在と見なしているのである。

また、コンフリクト理論的アプローチでは、主として葛藤や闘争に焦点をあてているが、相互作用的アプローチは葛藤や闘争以外にも多大な関心を払っている。このことは必然的に基本的仮定においてもいくつかの点で異なってくる。相互作用的アプローチは、生来的なコンフリクトや不調和を仮定してはいない。むしろ人間と社会とのあいだの調和を強調しているといつてもよいのである。

そして、また交換理論的アプローチの基本的仮定とも根本的に異なっている。さきの例示の第1番目の仮定との関係でいえば、相互作用的アプローチは人間の非合理的な精神現象をも大いに重視して関心を払っている。また先

の第2番目の仮定との関係でいえば、相互作用的アプローチは、むしろ相互作用の主体による主観的な「状況規定」(definition of situation) を大いに重視して、それにたいして多大な関心を払っているのである。

最後に、バアラがその分類のうちに位置づけている「現象学的アプローチ」について考察してみたい。¹⁷⁾ このアプローチは、社会的相互作用における主体の主観を重視するという点で、これまでに考察してきた諸アプローチとは異なって相互作用的アプローチの概念枠組に近似しているといえてよい。しかし基本的概念も基本的仮定も明らかにそれ固有のものを開発してきており、相互作用的アプローチとは根本的に異なっている。その基本的概念としては、例えば、生活世界、二次的構成物、理念的構成物、レリヴァンス体系、等々がある。このアプローチの周辺に位置するものとしては「エスノメソドロジック的アプローチ」があり、その基本的概念には、例えば、社会的秩序、発話行為、規範定立活動、等々がある。¹⁸⁾

現象学的アプローチにおける。基本的仮定も、明らかにそれと確認できるものばかりである。そのいくらかを提示してみると次のとおりである。すなわち、(1)個人の意識こそ社会に意味を付与する究極的根源であって、社会を捉えることのできる唯一の確実な立脚点である。(2)科学的構成物は、社会的現実が淵源する行為者の主観的意味に立脚してのみ可能である。(3)日常的知識は、類型化、つまり理念的構成物のレリヴァンス体系として成り立っている。この図式のもとに行為者は、つねに事物を独自性・唯一性からあらたに命名したり、解釈したり、意味づけたりしている。等々である。

またエスノメソドロジック的アプローチにおける基本的仮定のいくらかは次

17) このアプローチについては主として次を参照。

R. McLain and A. Weigert, "Toward a Phenomenological Sociology of Family: A Programmatic Essay," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, pp. 160-205.

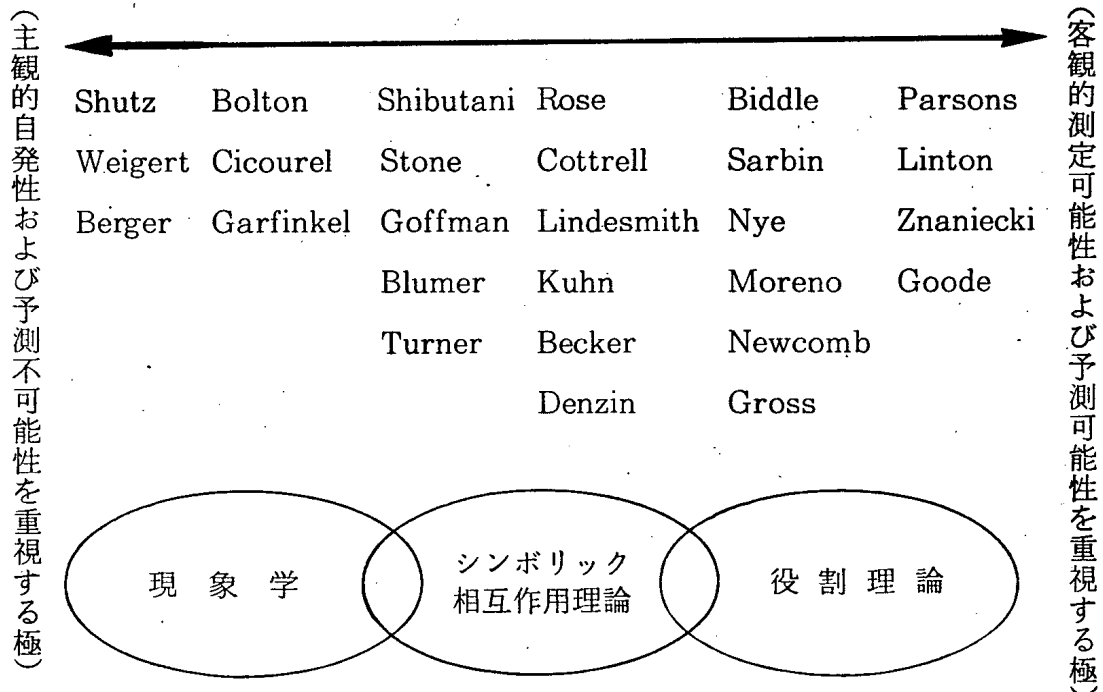
18) N. K. Denzin, "Symbolic Interactionism and Ethnomethodology: A Proposed Synthesis," *American Sociological Review*, Vol. 34, No. 6, 1969, pp. 922-934.

Harold Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall, 1967.

のとおりである。すなわち、(1)個々の状況において個人が行なう意味と秩序の再発見と再生産のメカニズムにこそ社会秩序の基底がある。(2)日常生活者は、規範定立的活動を行なっている。(3)相互作用は、時間的に連続的に流れている。そして、いかなる出会いでの発話も現実のできごとの流れとの関係なしには理解できない。等々である。

バアらは、¹⁹⁾ 相互作用的アプローチの立場にたった代表的な学者名を中心にして、左側に「社会的相互作用における主観的自発性および予測不可能性を重視する極」と右側に「社会的相互作用における客観的測定可能性および予測可能性を重視する極」とを設定して、それぞれ左右ならびに中央に各アプローチを代表する学者名を配置した図式を提示している。ここでは、いくらかの部分的修正を加えたかたちになってはいるが、その図式を提示してみると下図のとおりである。

【三学派を代表する学者名による分類】



19) W. R. Burr et al., "Symbolic Interaction and the Family," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. II, p. 51.

3. 相互作用のアプローチの基本的概念と変数

さて、ここでアメリカにおいて相互作用の発展を促したところの社会的相互作用の研究史をまずはじめにいくらかなりとも概観しておきたい。

いま相互作用の概念枠組の形成過程を辿ってみると、その出発点において、アメリカにおけるプラグマティズムの影響が大きかったことを見のがすわけにはいかないだろう。もともとプラグマティズムとは、知識の価値を実際の効用によって決定しようとする思想であって、直接的にも間接的にも特定の状況にその知識が適用されるときにのみ、その知識は意味をもつことになるという考え方であった。そしてまたプラグマティズムは、人間はその環境と一貫した相互作用のうちにあって、人間は自分が反応する刺激を目的論的に選択すると考えており、コミュニケーションがその関係にもつ効果や人びとによってかれらの考えを表現するのに利用されるサインの意味を吟味することが伝統的に重視されてきていたのである。

W. ジェームズ, J. M. ボールドウィン, J. デューイ, C. H. クーリー, W. I. トーマス, G. H. ミードらは、結局のところプラグマティズムの思想のエッセンスを吸収し、それを社会的相互作用の理論に公式化したといつてよいのである。以下、それぞれの研究をストライカーによる紹介を参考にしながら、相互作用のアプローチへの貢献という観点からいくらか紹介しておくことにしてみたい。²⁰⁾

まずジェームズ (1842—1910) は、自我 (self) を主我 (I) と客我 (me) に最初に分類した人である。かれはまた客我をさらに物質的自我, 精神的自我, ならびに社会的自我に分けて論じ、その社会的自我 (social self) に関してそれがパーソナリティの重要な部分であり、他者との相互作用すなわち

20) Sheldon Stryker, *Op. Cit.*, in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

社会関係に根拠をもつものであることを強調したのである。しかしジェームズは、ミードのように自我の発生のメカニズムを明らかにしたわけではなく、他者から受ける認知としてのいくつかの社会的自我の存在を示唆したのであった。²¹⁾

ボールドウィン (1861—1934) は、ジェームズの影響をうけて、学習によるパーソナリティの発達の過程を分析し、それが三段階の弁証法的展開の過程であることを明らかにしたのである。それはまず子供が対象から人間を区別することを知る「客観化の段階」(projective stage) から始まって、つぎに子供が他者の行動を模倣するにつれて、その行動に関連した感情の状態を学習する「主観化の段階」(subjective stage) へとすすみ、第3に、子供が人間に関してのかれ自身の概念によってこれらの感情を組織化し、そして他者がかれ自身と同じように感情をもっていることに気づくようになる「放出化の段階」(ejective stage) へと展開するというものである。²²⁾

デューイ (1859—1952) は、「個人にたいして社会の優越性を語ることは、無意味な抽象論に耽ることになるが、しかし人間の前存在的組織がその世界に生まれるすべての人間にとって優先的であるということは平凡なことを述べていることなのである」と言い、パーソナリティが社会的文脈のなかで発達することを強調している。²³⁾ のちに述べるように、このことは相互作用的アプローチにとっての基本的仮定の1つとして位置づけられる重要なパースペクティブである。

クーリー (1864—1929) は、上記の3名の考え方を継承し、それを社会学的に明らかにしようとした人である。クーリーによれば、明確に社会的であるもの、すなわち社会学者にとって関心のあるものは、精神的なもの、そし

21) William James, *Psychology*, Holt, 1892, p. 179 (今田訳『心理学』岩波書店, 1939).

22) J. M. Baldwin, *Mental Development in the Child and Race*, MacMillan, 1906, p. 17.

23) John Dewey, *Human Nature and Conduct*, Modern Library, 1930, pp. 58-59.

て主観的なものであると言ひ、これを否定することは「生活それ自体をごまかしている」(dodging life itself) ことになると言ふ。そして「現実の人間」とは、個人のそうした精神的ならびに主観的な考えのなかに存在していると強調している。²⁴⁾

またクーリーによれば、自我は社会的相互作用のなかで規定され、発達するもので、それは社会的産物であるという。そして、それは他者に自分がどう見えるかの想像の形をとって他者の心に帰属させることによって拠りどころをもつことになると言ふ。クーリーは、この種の社会的自我を「鏡に映った自我」(looking-glass self) と規定したのである。そして、その社会的自我を作りあげていく自我観念 (self-idea) には3つの要素があると説明している。すなわち第1に、他者に自分がどう見えるかについての自分自身の想像、第2に、他者がそれをどう判断しているかについての想像、そして第3に、これらに関連した誇りや屈辱といった自我感情 (self-feeling) の3つである。クーリーは、結局のところ如何なる個人性 (individuality) も社会的秩序の枠外には存在しないということ、そしてその発達が他者による期待と関係しているということを明らかにしようとしたのである。²⁵⁾

トーマス (1863—1947) は、「状況規定」についての主観的ならびに方法的な意義を強調した人である。そのためにトーマスは、日記、手紙、自伝といった個人的資料 (human documents) の社会学的意義を強調した人でもある。トーマスは、人間の行動の主観的事実を重視し、つぎのように述べている。²⁶⁾ すなわち「もし人びとが状況を現実として規定すれば、それらは結果において現実なのである。」これは現在、相互作用的アプローチにとってのもっとも重要を仮定の1つとなっているものである。

24) C. H. Cooley, "The Roots of Social Knowledge", *American Journal of Sociology*, Vol. 32, 1926, pp. 59-79.

25) C. H. Cooley, *Human Nature and the Social Order*, Scribner, 1902, pp. 151-153 (納武訳『社会と我——人間性と社会秩序——』日本評論社, 1906).

26) W. I. Thomas and D. S. Thomas, *The Child in America*, Knopf, 1928, p. 572.

またトーマスは次のようにも言っている。²⁷⁾「何らかの形で順応しようとする努力は、与えられた線にそって行為するか否かを決定することが前提となっている。その決定は、それ自体、状況についての規定すなわち解釈ないしは視点によって先導される。」状況そのものについてのトーマスの概念規定は、じよじよに変化していつているが、ほぼ次のとおりである。²⁸⁾「状況は、価値および態度の組合わせである」(1918年)。「状況は………行動反応を条件づける諸要素の構成体 (configuration) である」(1927年)。「状況は、価値や態度はいうまでもなく『すべての制度やモーレス』を含む『社会関係の状況』である」(1931年)。

ミード (1863—1931) は、批判的とはいうものの以上のすべてを吸収し、それぞれを1つに体系化させた人である。ミードは、パーソナリティの問題を主として自我 (self) の概念によって取りあつかい、自我は主我 (I) と客我 (me) に構造化され、客我は社会的役割とほぼ同じものであって、人が自分の自我について結びつける他者の組織化された態度として規定している。また主我は、他者の組織化された態度にたいする有機体の反応を意味し、自我の自発性や創造性をとおしての社会的経験における変化を説明するのに用いられる。

ミードの貢献は、こうした自我の構造についての理論だけではない。むしろ、それは相互作用の過程を意味あるシンボルの体系である言語とか身振りなどによる会話や他者の「役割取得」(role-taking) の過程として把握することによって、自我そのものの発生のメカニズムを明らかにしたことである。

27) W. I. Thomas, *Primitive Behavior: An Introduction to Social Science*, McGraw-Hill, 1937, p. 8.

28) W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, Badger, 1918, Vol. I, p. 6.

W. I. Thomas, "The Behavior Pattern and the Situation", *Publication of American Sociological Society*, Vol. 22, 1927, pp. 1-3.

W. I. Thomas, "The Relation of Research to Social Process," in W. F. G. Swam et al. (ed.), *Essays in Research in Social Science*, Brookings, 1931, p. 176.

ミードは、役割取得の2つの段階をとおしてその発達を分析している。すなわち子供は、まず初期の「プレイ」をとおして他者の役割を取得していく。つまりプレイは、母親や先生や想像上の仲間などといった誰かである形をとって進行するのである。そして次の段階になって、子供は「ゲーム」をとおして「一般化された他者」(generalized others)の役割を取得していくことになる。ゲームの場合には、子供は他者たちの複雑に関連しあっているパターンに反応して行動をすすめる。そこでは子供は、参加者すべての役割を取得することになり、そのことによってゲームの一部になるのである。²⁹⁾

ミード以後の発展は、客我というよりも、むしろ主我の働きをとくに重視し、その理論化をすすめた H. G. ブルーマーが理論的リーダーとなり、「シンボリック相互作用論」(symbolic interactionism) という固有の名称を採用することによってシンボリック相互作用理論における確固たる「シカゴ学派」の伝統を継承かつ発展させたのである。³⁰⁾ しかしブルーマー自身が1952年にカリフォルニア大学バークレー校に移ることによって、またシカゴ大学において共に1938年に Ph. D. をとった T. シブタニと R. H. ターナーもそれぞれカリフォルニア大学サンタバーバラ校とロスアンゼルス校に勤務することになり、シカゴ学派はカリフォルニア大学に移動するという結果になったのである。

一方、K. ヤングをとおしてウィスコンシン大学でミードの理論を学んだ M. H. クーンを中心にアイオワ大学において「アイオワ学派」が展開することになった。イリノイ大学で活躍している N. K. デンジンも、この学派に所属している。アイオワ学派は、自我や対人関係の分析のための「鍵」概念の操作化に多大な関心を払ってきており、ミードの考え方のより決定的で予測可能かつ観察可能な測面に焦点をおいている。ミードの自我理論のあいまい

29) G. H. Mead, *Mind, Self, and Society*, University of Chicago Press, 1934 (稲葉ほか訳『精神・自我・社会』青木書店, 1974).

30) H. G. Blumer, "Social Psychology," in E. R. Schmidt (ed.), *Men and Society*, Prentice-Hall, 1938, pp. 144-198.

さの克服のためにその検証可能な方法を求めてクーンらが開発した TST 法 (Twenty-Statements Test Method) は、その努力の1つの成果である。³¹⁾

さらに、もう1つの学派の展開は、A. M. ローズを理論的リーダーとする「ミネソタ学派」である。³²⁾ ローズのあとは G. P. ストーンが継承している。ミネソタ学派は、シカゴ学派とアイオワ学派の中間的位置をとって極端をさけ、その他の学派よりも幅広い概念の組合わせを用いている。そこで、シカゴ学派とアイオワ学派がそれぞれ重視するものの相違を図にして整理してみると、ほぼ次のようになるだろう。ミネソタ学派は、これらの中間的位置にあるということになる。

【シカゴ学派とアイオワ学派の重視するものの相違】

シカゴ学派	非決定性・質的データ・記述的理論化・主観性・予測不可能性
アイオワ学派	決定性・量的データ・公式的理論化・客観性・予測可能性

こうした学派の今日的状況を最後に述べてみると、第1に各学派の人びとが全国の大学に分散し、各学派の文献の利用が容易になり、学派間の相互浸透がすすんできているということ、第2に1973年にシンボリック相互作用研究会 (The Society for the Study of Symbolic Interaction) が組織化され、理論的な統一化の傾向を示してきているということ、そして第3に H. D. ダンカンや E. ゴフマンらについてであるが、かれらはともにシカゴ大学で Ph. D. をとってはいるが、ブルーマーの枠にはまっておらず、それぞれ極めてユニークな方向を示してきているということである。そこで、今日にみる相互作用的アプローチの展開は、(1)役割理論、(2)準拠集団の理論、(3)認知理論、(4)自我理論、(5)演出論的アプローチ、(6)その他、対人関係論などといった具合にますますの理論的深化がすすめられてきているのである。

さて、相互作用的アプローチの基本的概念ならびにその変数についてはバ

31) M. H. Kuhn and T. S. McPartland, "An Empirical Investigation of Self-Attitudes," *American Sociological Review*, Vol. 19, No. 1, 1954, pp. 68-76.

32) A. M. Rose (ed.), *Human Behavior and Social Processes*, Houghton Mifflin, 1962.

アらの分類した図式がある。³³⁾ 以下にそれを提示してみることにしたい。ゴチック体は基本的概念であり、その他は変数である。そして一字下りのものは下位カテゴリーである。

【相互作用적のアプローチの基本的概念と変数の分類】

基本的概念	自我の取扱い	役割の取扱い		对人的現象
心	主 我	役割取得	期待	意味ある他者
意味	客 我	役割取得の明確さ	期待の体系化	裁定
価値	社会的自我	役割実行	期待の明確さ	目標達成の便益
シンボル	社会的歪曲	役割実行の質	役割強要	一般化された他者
意味あるシンボル		遂行の複雑さ	期待の一般性対特殊性	準拠集団
行為		有機体関与	期待の拡大化の見通し	観衆
役割		演技上のバイアス	期待の知識の証拠	
位置		役割の先買性	役割葛藤	
規範		役割距離	役割の両立性	
相互作用		役割創出	役割緊張	
身振り		役割の数	許容行動の範囲	
状況規定		役割移行の容易さ	期待の合意	
		役割継続	役割期待にしたがう役割行動の重要性	
		役割技能	予定された社会化	

バアらのこうした分類のうち、とくに今日の段階で確認されているいくつかの変数の定義づけを次に紹介しておきたい。それらは後述するバアらの「中範囲理論としての相互作用理論の諸命題群」を理解するのに不可欠となるものである。

まず第1は、役割実行の下位カテゴリーである「有機体関与」である。これは1つの役割が要請している個人の努力、集中、熱中の度合いである。つぎに「役割緊張」であるが、これは人が役割あるいは役割の組合わせの期待に沿うことができないか、あるいは応ずるのに困難さを感じる時、その人の内部で発生するストレスである。つぎに「役割実行の質」であるが、これは役割実行について問題にされる実行の適応性 (appropriateness) や妥当性

33) W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, p. 102.

(propriety) や説得性 (convincingness) などである。ナイは、例えば、それを (1)他者よりまずい、(2)他者とほぼ同じ、(3)他者より良い、といった具合に変数化している。³⁴⁾

つぎに「役割の数」であるが、これは個人の生活状況を作りあげている役割の組み合わせにおいてどれだけ異なった役割が存在しているかということである。つぎに「役割移行の容易さ」であるが、バアが以前から論じてきている問題であって、³⁵⁾ 要するに、役割に入ったり、出たりすることの容易さ、あるいは困難さにおける多様性を意味している。それは他の役割における如何なる変化もなしに役割の付け加え、あるいは終了を意味するもので、日々のある役割から他の役割への移動は含まれていない。

つぎに「役割期待の合意」であるが、これは二人以上の人びとのあいだの役割期待にどれほど賛成あるいは反対が存在するかに関連しており、人びとが役割遂行者にたいして期待していることに互いに賛成している場合に、合意は高いということになる。そして最後に「役割期待の明確さ」であるが、これは期待がどのくらい曖昧か、またはどのくらいはっきりしているかということで、個人が何をなすべきで何をなすべきでないかが確かでないような状況では、期待の明確さは低いということになるのである。

さて、ここでバアらが提示している今日の段階での中範囲理論としての相互作用理論の諸命題群を紹介しておくことにしたい。³⁶⁾ バアらは、それらを次のような6つの命題群に整理している。すなわち、(1)対人能力に関する理論、(2)状況規定に関する理論、(3)満足に関する相互作用理論、(4)役割実行に

34) F. I. Nye, "Emerging and Declining Role," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 36 (May 1974), pp. 238-245.

35) W. R. Burr, "Role Transition: A Reformulation of Theory," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 34 (August 1972), pp. 407-416.

36) ストライカーは、相互作用的アプローチは概念枠組であって社会化とパーソナリティの問題に関するもの以外は理論ではないと述べている。しかしバアらは、中範囲理論としてそれを位置づけている。ここではバアらに従っておく。(S. Stryker, *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.)

関する理論，(5)役割緊張に関する理論，(6)役割移行に関する理論のそれぞれの諸命題群である。以下，各理論ごとにそれぞれの諸命題群を整理して提示してみることにしてみたい。

【中範囲理論としての相互作用理論の命題群】

(1) 対人能力に関する理論

〔命題1〕個人のレパトリーにおける文化的シンボルの数が多ければ多いほど，対人能力は大きい。³⁷⁾

〔命題2〕他者の役割取得の能力が大きければ大きいほど，対人能力は大きい。

〔命題3〕役割技能のレパトリーが大きければ大きいほど，対人能力は大きい。³⁸⁾

〔命題4〕自我についての概念化が複雑になればなるほど，対人能力は大きい。

(2) 状況規定に関する理論

〔命題1〕状況規定は，その状況の効果が規定と一致する傾向があるような形で状況の効果に影響を与える。³⁹⁾

〔命題2〕現象について認知された価値が大きければ大きいほど，社会的過程においてそれがもつ可能性のある効果は大きい。

〔命題3〕もし人びとがその状況を現実として規定するとすれば，その結果として状況は現実である。⁴⁰⁾

37) 対人能力とは，フートおよびコットレルの用語で，かなり長期の複雑な人間関係において効果的に機能する能力あるいは技能を意味している (N. Foote and B. Cottrell, *Identity and Interpersonal Competence*, University of Chicago Press, 1955.)

38) 役割技能のレパトリーについては，サービンおよびアレンによって，ある一定のレベルまである課題を達成する身体的ならびに心理的用意と規定されている。(T.R. Sarbin and V.L. Allen, "Role Theory," in G. Linzey and E. Aronson (eds.), *Handbook of Social Psychology*, 2d ed., Addison-Wesley, Vol. I. 1968, p. 541.)

39) 状況の効果とは，状況が有する客観的な効果で，人びとのもつ認識とは独立の何らかの効果の意味している。例えば，飲物が鎮静の効果をもったりすることである。

40) この命題は，W.I. トーマスの命題である。

(3) 満足に関する相互作用理論

〔命題1〕 関係のなかで認知された役割実行の質は、関係のなかにある個人のもつ満足に影響を与える。そして、この関係は肯定的かつ直線的関係である。

〔命題1 A〕 自分の役割実行の質は、自分の満足に影響を与える（肯定的、直線的関係）。

〔命題1 B〕 他者の役割実行の質は、自分の満足に影響を与える（肯定的、直線的関係）。

〔命題2〕 役割期待が個人にとって重要であればあるほど、役割実行の質がその個人の満足にもつ効果は大きい。

〔命題3〕 個人の全体としての状況についての相対的不満 (relative deprivation) が大きければ大きいほど、その個人の状況への満足は小さい。⁴¹⁾

〔命題4〕 関係において関連ある役割期待の合意の量は、関係との満足に影響を与える（肯定的関係）。

(4) 役割実行に関する理論

〔命題1〕 役割期待の認知された明確さが大きければ大きいほど、役割実行の質は高い。

〔命題2〕 認知された役割軋轢が大きければ大きいほど、役割実行の質は低い。

〔命題3〕 役割位置づけの正確さが大きければ大きいほど、役割実行の質は

41) 相対的不満とは、人が自分自身の状況を評価するのに影響する変数のことで、個人にとって準拠点を形づくる他の人の状況と比較したその人の状況の質的側面における多様性のことである。それは「他の人よりもずっと悪い」から「他の人よりもずっと良い」までの連続体的変数である。

R. K. マートンらは、S. A. スタウファーらの『アメリカ兵』（1949年）のデータを整理、検討するなかから「相対的不満」の概念よりも「準拠集団」の概念のほうが事象を説明するのに有効であることを見いだしている。(R. K. Merton and A. S. Kitt, "Contributions to the Theory of Reference Group Behavior," in R. K. Merton and P. F. Lazarsfeld (eds.), *Continuities in Social Research: Studies in Scope and Method of the American Soldier*, Free Press, 1950.)

高い。⁴²⁾

〔命題4〕自我と役割の一致が大きければ大きいほど、役割実行の質は高い。⁴³⁾

〔命題5〕役割緊張が大きければ大きいほど、役割実行の質は低い（時間的ズレを伴った曲線的関係）。

〔命題6〕他者による役割強要への感受性が大きければ大きいほど、役割実行の質は高い。⁴⁴⁾

〔命題7〕観衆によって与えられる裁定に関する認知された量は、役割実行の質に影響を与える（曲線的関係）。⁴⁵⁾

〔命題8〕自分が観衆によって観察されていると認知すればするほど、命題7（裁定が役割実行に影響を及ぼすという命題）の影響力は大きい。

(5) 役割緊張に関する理論

〔命題1〕個人が自分の占有する役割についての期待に合意を感じるのが大きければ大きいほど、役割緊張は小さい。

〔命題2〕役割期待の認知された明確さが大きければ大きいほど、役割緊張は小さい。

〔命題3〕人の役割の多様化が大きければ大きいほど、それらの役割についての期待においてその人の認知する合意は小さい（それゆえ緊張は大きい）。⁴⁶⁾

42) 役割位置づけ (role location) とは、「その人の環境との関係において、その人の役割を位置づけること」で、行為、外観、シグナル、前おれの事件、より大きなシステムの目標などが位置づけの手がかりとなる。

43) 自我と役割の一致とは、その役割の好きな人、関与している人、コミットしている人、合っている人といったような場合である。

44) 役割強要とは、役割実行における行為者に特殊な束縛を強いる他者の行為によって提供される言わばもがなの合図や圧力のことである。

45) 観衆 (audiences) について、ゴフマンは、役割にとって合意という現実を確立するのに、また長期に役割が維持されるために不可欠であると指摘している。(Erving Goffman, *Behavior in Public Places*, Free Press, 1963.)

46) 役割の多様化 (role diversification) とは、巾広い多様性のある役割との関係の維持を

- 〔命題4〕人が自分に定められていると信じている活動が多ければ多いほど、役割緊張は大きい（曲線的関係）。⁴⁷⁾
- 〔命題5〕個人が定められた活動を委託（delegate）することが多ければ多いほど、個人のもつ定められた活動は少ない。
- 〔命題6〕役割累積が多ければ多いほど、定められた活動の数は大きい。⁴⁸⁾
- 〔命題7〕役割累積が大きければ大きいほど、役割実行から人が受ける報酬は大きい。⁴⁹⁾
- 〔命題8〕役割実行から個人が認知する報酬が大きければ大きいほど、活動の量と役割緊張とのあいだの肯定的関係（命題4）は弱い。
- 〔命題9〕人が自分の役割が両立していないと認知することが多ければ多いほど、役割緊張は大きい。⁵⁰⁾
- 〔命題10〕役割累積が大きければ大きいほど、その組み合わせにおいて認知される役割の非両立は大きい。
- 〔命題11〕役割実行からの報酬が大きければ大きいほど、役割非両立と役割緊張とのあいだの関係（命題9）は弱い。
- 〔命題12〕役割のコンパートメント化が大きければ大きいほど、役割非両立と役割緊張とのあいだの関係（命題9）は弱い。⁵¹⁾

(6) 役割移行に関する理論

意味する。W. J. グードは、役割義務（role obligations）の数は、役割緊張の量に影響すると指摘している。（W. J. Goode, "A Theory of Role Strain," *American Sociological Review*, Vol. 25 (August 1960), pp. 488-496.）

47) 定められた活動の量とは、規範的に定められた活動の全体量のことである。

48) 役割累積（role accumulation）とは、人の役割組み合わせ（role set）における役割全体の数のことである。

49) 報酬とは、例えば、役割特権、全体的な地位保障、地位向上、役割遂行のための資源、人格の内容豊富化、自己満足などである。（S. D. Sieber, "Toward a Theory of Role Accumulation," *American Sociological Review*, Vol. 39, 1974, pp. 567-578.）

50) 役割の非両立とは、役割間の不一致や矛盾や、あるいは対立を意味する。

51) 役割のコンパートメント化とは、役割緊張や役割の非両立あるいは役割葛藤を避けるために、役割を演ずるのに物理的な位置あるいは社会的状況を区別して、他方の役割とのあいだに距離を作り出すことを意味する。

〔命題1〕 役割についての予定された社会化が多ければ多いほど、その役割への移行の容易さは大きい。⁵²⁾

〔命題2〕 役割を遂行することから生じる認知された役割緊張が大きければ大きいほど、役割への移行の容易さは小さい。

〔命題3〕 役割を遂行することから生じる認知された役割緊張が大きければ大きいほど、役割からの移行の容易さは大きい。

〔命題4〕 役割への移行手順 (transition procedure) が大切および／あるいは明確であればあるほど、役割への移行は容易である。

〔命題5〕 役割からの移行手順が大切および／あるいは明確であればあるほど、役割からの移行は容易である。

〔命題6〕 役割移行において認知される規範的变化が大きければ大きいほど、役割への移行は容易ではない。⁵³⁾

〔命題7〕 役割移行において認知される規範的变化が大きければ大きいほど、役割からの移行は容易ではない。

〔命題8〕 役割が個人の目標達成に便益を与えるのが多ければ多いほど、役割への移行は容易である。

〔命題9〕 役割からの移行が個人の目標達成に便益を与えるのが多ければ多いほど、役割からの移行は容易である。

〔命題10〕 役割が目標達成を妨げるようなとき、人が長くその役割にあることを期待していればいるほど、役割への移行の容易さに関して目標達成の

52) 予定された社会化 (anticipatory socialization) とは、何らかの役割において実際に行動することが適当であるような状況にある以前に、規範や価値や態度や、または役割の微妙な次元を学習する過程である。役割モデルの観察は、そのプロセスを容易にするだろう。

53) 規範的变化の量とは、ある特定の時期における個人の全体の役割組合せにおいて変化しつつある規範の数や規範の社会的意味などを意味する。社会的役割における規範的進化とか、役割創出 (role making) から生じて共有されることになった期待などは、ともにこうした変化を作り出すことになる。役割移行は、社会に存在している問題の役割に関する規範を変化させはしないが、しかし、その個人の生活状況ないしは位置における個人にかかわる規範を変化させることになるのである。

ための便益の多様性のもつ影響力は大きい（命題8の関係は大きい）。

〔命題11〕 役割が目標達成を妨げるようなとき、代替となる満足の存在が多ければ多いほど、役割への移行の容易さに関して目標達成のための便益の影響力（命題8の関係）は小さい。

〔命題12〕 目標にたいする価値づけが多ければ多いほど、命題8と9において生じる影響力は大きい。

4. 相互作用的アプローチの基本的仮定と焦点

さて、つぎに相互作用的アプローチにおける基礎ともいえる「基本的仮定」をここでいくつか確認して置くことにしてみたい。⁵⁴⁾

まず第1の仮定は、(1)「人間は、物理的環境はもちろんのことシンボリックな環境のなかで生活しており、人間は心のなかに複雑なシンボルの組合せを獲得している」(A. M. Rose (ed.), *Op. Cit.*, 1962, pp. 5-6.) というものである。この仮定は人間とは混虫のような低い生活の形態からは異なっており、それは学習し、記憶し、シンボルをとおしてコミュニケーションをする能力を有しているということを意味している。人間が学習するそのシンボルとは、意味を有している言葉や考え方のような精神的に抽象的なものであって、例えば、言語、身振り、声の抑揚、外観、さらには静寂さ、部屋の飾りつけ、等々といったものを含むものである。そして、そのほとんどは他者

54) 相互作用的アプローチにおける基本的仮定については、すでにアメリカにおける家族研究の分野において、次のいくつかの文献が整理を試みている。ここでは現時点においてもっとも新しい文献であるバアらのそれによって整理しておく。バアらの整理は、過去の各整理をそれぞれほぼ網羅しているといつてよい。

Sheldon Stryker, "Symbolic Interaction as an Approach to Family Research," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 111-9.

R. Hill and D. A. Hansen, *Op. Cit.*, *Marriage and Family Living*, Vol. 22, 1960, pp. 299-311.

J.D. Schvaneseldt, *Op. Cit.*, in Nye and Berardo (eds.), *Op. Cit.*, 1966, pp. 97-129.

W.R. Burr et al., *Op. Cit.*, in W.R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. II, pp. 42-111.

から学習することによって獲得されたものである。その意味で、まさに学習がその人間にとってある状況や客体の存在ないしは出現を可能にするということになるのである。

第2の仮定とは、すなわち(2)「人間は価値判断をする」というものである。何がシンボルかを学習することは、確かに人間の心のなかで生じる1つのプロセスであるが、もう1つのプロセスが存在するのである。すなわち、それはシンボルについて評価的弁別をすることを学習することである。つまり価値判断そのものを学習するということであるが、この価値判断とは、結局、あるものにたいする魅力あるいは嫌悪、そしてさまざまな現象の意義や規定(定義づけ)ということになる。これらの精神的過程もシンボルの内容と同じように、われわれが相互作用している他者から学習したものである。人間は新しいシンボルを学習したり、あるいはそれら进行评估したりする能力を無限に備えているものといっよよいようである。

第3の仮定は、(3)「シンボルは人間行動を理解するのに重要である」というものである。この仮定は、人間についての見方として、行動というものが本能やリビドー的エネルギーや衝動や、あるいは内面化された損得の動機などによってではなく、心のなかにあるその人の観念的意味づけによって影響されるという仮定である。つまり、人間は学習されたシンボルやそれらの意味の重要性についての信念にもとづいて何をするか、あるいは何をしないかを決定するというものである。これはJ. B. ワトソンらの行動主義(Behaviorism)とは異なっており、かれらによって忌み嫌われたブラック・ボックス的変数そのものを相互作用的アプローチでは、パンおよびバターにしているのである。

精神的変数については精神分析理論もその焦点として位置づけてはいるが、しかしリビドー的エネルギーや死の衝動のような本能的諸力を強調している点において相互作用的アプローチの取りあつかう精神的現象とは異なっている。また交換理論は、社会的相互作用に焦点を置いているという点で相互作

用的アプローチの取りあつかっている概念をいくつか問題にしてはいるが、しかし、それは相互作用的アプローチが重視する諸概念である自我、認知、あるいは状況規定などについては焦点を置いていないのである。

第4の仮定は、(4)「人間は自省的 (reflexive) であって、その内観行動 (introspection) は、じょじょに自我規定 (definition of self) を形成する」(A. M. Rose (ed.), *Op. Cit.*, 1962, pp. 11-12.) というものである。人間は、まず多様な客体を区別することによって物を考えることができる。幼児は、足、手、指、髪の毛、その他の部分を発見し、初歩的な段階から何が自分の自我なのかを発見するような高度な段階にすすむ。そして、さらには何が自分の傾性、傾向、あるいは特性なのかを決定しようと試みるほどの精緻なものとなる。この段階では、自分自身の個人的な自我の部分である経験的部分と自分自身の自我でない部分とのあいだを区別する能力を獲得しているのである。この場合、自我は、固定した静的対象として認知されるというよりも、むしろ自覚 (being aware) とか、自分の自我それ自体として規定するプロセスとして存在しているといつてよい。

ここにおいて相互作用的アプローチは、「人間は自分自身と相互作用することができる」というダイナミックな自我の心的過程を仮定していることになるのである。シンボリック相互作用論の命名者であるシカゴ学派のブルマーがミードを越えて客我よりも主我を重視し、自我の心的過程を明らかにし、それを解釈の過程として定式化し、まさに人間の主体性を強調したが、⁵⁵⁾ 精神分析の理論も、また構造・機能的分析の理論も、このプロセスを正当に評価しているとはいえないのである。

第5の仮定は、(5)「自我は、いくつかの異なった部分を有している」というものである。第1の区別は、身体的自我 (physical self) と社会的自我 (social self) の区別である。身体的自我は、人間の身体とそのさまざまな

55) H. G. Blumer, *Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall, 1969.

部分に関連しており、社会的自我は人間が社会や社会の下位単位、とくに緊密な仲間たちと関係するものに関連している。その他の区別は、いわゆる主我と客我という自我の部分の区別である。客我は、本質的には学習され、反復された部分としての社会的自我の部分として成り立っている。客我は、人びとが取得している役割を含んでおり、かなり緻密に組織化されており、ほとんどの人は、そこにかかなり安定した社会環境を保持している。自我のこの客我の部分は、また他者たちが頼りにすることのできる他者たちの学習した部分でもある。

他方において、主我は、予測不可能で、自発的で、個人にとって固有な部分として位置している。これら主我と客我は、自我の単純な静的な部分ではなく、また一方向的でもなく、完全でもなく、進行しつつある自我過程 (self-process) といったほうが正しい。かくして、相互作用的アプローチは、ある程度は社会決定論 (social determinism) であり、またある程度は非決定論 (non-determinism) であるということになるのである。

第6番目の仮定は、(6)「人間は、反応者であることはもちろんのこと行為者でもある」(Sheldon Stryker, *Op. Cit.*, in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, p. 135.) というものである。事実、人間は外的環境からの刺激にただ単に反応するだけではない。人間有機体にとっての外的環境は「現実」の世界の選択された断片である。そして、その選択は、人間自身が開始する行動の関心にもとづいて生じるのである。かくして環境が何であるか、あるいは刺激として何が作用するのかは、人間有機体の携わっている活動に依存しているのである。対象は、それらが個人のインパルスを満足させるのに役だつとき刺激となるのである。

人間は、物理的に与えられた環境に反応するのではなく、シンボリックな過程をとおして媒介される環境、つまりシンボリックな環境 (symbolic environment) に反応しているのである。そしてまた、われわれは自分たち自身のシンボルを作りだすことができるということから、われわれは自己刺

激 (self-stimulating) 的でもありうるということになる。要するに、われわれは自分たち自身の内的なシンボリックな産物にも反応することができるのである。

ストライカーは、相互作用的アプローチの基本的な方法論的原理を導くのは、この仮定であると言い切っている。⁵⁶⁾ つまり調査研究者たるものは、その調査研究について自分の主観の視点から世界を見なければならないという原理は、この仮定にもとづくというのである。相互作用的アプローチのこの仮定は、行為に先行する「解釈過程」の重視であるとともに、主体性ならびに変革性の強調でもあるだろう。ターナーの重視する「役割創出」(role-making) の概念は、この仮定を前提にして役割実行における人間の主体的性格の表出に関する可能性を示した概念とってよいだろう。⁵⁷⁾

第7番目の仮定は、(7)「幼児は、生来的に社会的 (prosocial) でもなく、また反社会的でもなく、むしろ非社会的である」(Sheldon Stryker, *Op. Cit.*, 1964, p. 135.) というものである。この仮定については、すでに精神分析的アプローチの基本的仮定を考察したとき、いくらかのことを指摘しておいた。相互作用的アプローチにおいては、精神分析理論におけるように、人間が生来的に一定の方法で行為する性向というものを仮定してはいない。それよりもむしろかれの会おうものに反応すると考えており、人間の本性は、かれの会おうものが何かによって決定されると仮定している。そして人間はひとたび生活をはじめると並はずれた潜在能力を表わすものと仮定しているのである。

第8番目の仮定は、(8)「社会は個人に先行している」(A. M. Rose, *Op. Cit.*, 1962, pp. 13-14, および S. Stryker, *Op. Cit.*, 1964, pp. 134-135.) というものである。この仮定は、いわゆる単純な社会实在論などではない。わ

56) Sheldon Stryker, *Op. Cit.*, 1964, p. 135.

57) R. H. Turner, "Role-taking: Process versus Conformity," in A. M. Rose (ed.), *Op. Cit.*, 1962, pp. 20-40.

れわれが住んでいる社会は、われわれが母親の「おなか」から生まれてくる以前からすでに存在しているということから、われわれは常に社会的真空のなかに生まれてくるわけではないということである。この場合、社会は文化によって作られており、それは意味と価値の統合化された組み合わせとして存在しているのである。パーソナリティは、こうした社会的文脈のなかで形成されることになるのである。

第9番目の仮定は、(9)「社会と人間とは、同じものである」というものである。相互作用的アプローチは、人間と社会とのあいだの調和を強調している。ミードも指摘しているように、個人は文化を学習し、そして社会になるのである。人びとは相互作用において不調和や葛藤に出会うとき緊張を経験することになるが、しかし、これは社会と葛藤するといった必然的傾性(natural inclination)の状態ではないのである。それは変化が生じていたり、下位文化の差異が存在していたり、あるいは価値を有する資源が希少であることによって社会が結果的に不調和を呈することになるに過ぎないのである。相互作用的アプローチは、精神分析理論やコンフリクト理論などのように個人と社会とのあいだに本来的な緊張の存在を仮定してはいないのである。

第10番目の仮定は、(10)「人間の心は、消し去ることができないものである」(A. M. Rose, Op. Cit., 1962, p. 17.) というものである。個人にとって古くなってしまった集団や文化的期待は、それらが準拠関係の尺度において著しく低下してくるという意味において個人的な意味や価値という点で著しく下落させられた存在となってしまうかもしれない。しかし、それらは喪失してしまったり、あるいは忘れ去られてしまったりはしない。だからといって、単なるバラバラな「古い」という項目の維持だけでもない。すなわち、そこには存在しているものと新しく獲得された意味や価値との統合ないしは継続的な修正が生じているのである。こうした統合という意味において、人間の行動は、その人の生活史の産物であり、その人のすべての経験の産物で

ある。それは社会的ないしは個人的，ならびに直接的ないしは他者とのコミュニケーションをとおしての他者の身になって感じたすべての経験の産物である。

第11番目の仮定は、(11)「人間は、その人間自身の水準で研究されるべきである」(S. Stryker, Op. Cit., 1964, p. 134.) というものである。相互作用的アプローチではモルモットやモンキーのような人間以下の存在についての調査から学ぶことのできる価値あるものは、ほとんどないと考えている。⁵⁸⁾ この仮定は、相互作用的アプローチにおけるケース・スタディや社会調査の質的タイプの強調ということへと導いていくことになる。⁵⁹⁾

「その人間自身の水準」つまり行為者の観点とは、研究者が人間の行為を理解するのに行為者の内側に入りこみ、行為者の見地から対象や状況を把握しようとするアプローチということであって、研究者が対象行為者の役割取得をすることにほかならない。したがって、相互作用的アプローチにおいては概念の操作化あるいは変数化も、その方向でなくてはならないということになるだろう。ここで主観重視のブルーマーらのシカゴ学派と経験主義的ならびに自然科学的方法重視のクーンらのアイオワ学派との理論的統一も、結局のところ概念の操作化あるいは変数化においてそれが行為者すなわち主体の見地にたつてのものであることを条件にして、その限りにおいてのみ可能であるということになるのではないだろうか。⁶⁰⁾ 操作的概念に対置したかたちでブルーマーの重視している感得的概念 (sensitizing concept) も最終的には操作化ないしは変数化といった経験科学の方法に耐えなければならない

58) A. R. Lindesmith and A. L. Strauss (eds.), *Social Psychology*, Holt, Rinehart & Winston, 1968, pp. 13-15.

59) しかしながら、すでに指摘したように、M. H. クーンや A. M. ローズらのような人びとによる相互作用的アプローチには高度に量化された方法も用いられてきている。

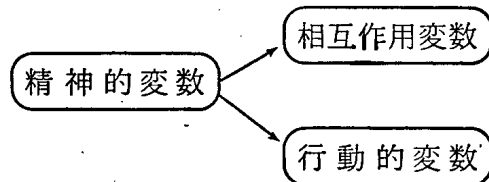
60) 例えば、「役割葛藤」(role conflict) という概念の操作化の場合には、主体が「役割軋轢」(role dissensus) をどれほど感じているかといった方向に変数化されなければならないということになるだろう。

はずである。⁶¹⁾

さて、つぎに相互作用的アプローチにおける「焦点」について主としてバ
アラの説明を紹介しながら、いくらか述べて置くことにしてみたい。⁶²⁾

まず相互作用的アプローチは、説明変数 (explanatory variables) として精
神の変数を重視しているということである。つまり、このアプローチでは人
間の行動を理解する最善の方法は、人びとの心のなかで生起している精神的
意味や価値を問題にすることだと考えているということである。これを図に
すれば図1のごとくになるだろう。

〔図1〕

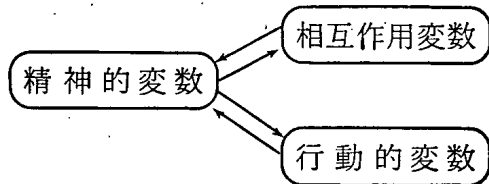


しかしながら、だからといって、
すべての精神変数を重視している
わけではない。すなわち、あること
が個人にたいして有する意味と、

「価値づけの過程」(valuing process), すなわち、あることが個人にとって
どれほど重要か、あるいはセイリエンスの度合いが高いか低いかということ
の主として2つの過程を重視しているということである。⁶³⁾

つぎに、このアプローチでは第一
次集団あるいは準拠関係における緊
密な人びとからのフィードバックの
性質、つまり互恵的過程に注目を払
っている。

〔図2〕



61) ブルーマーは、「操作的概念」に対置して一定の属性や基準などを有さない一般的な観
念のみを示唆する概念として「感得的概念」を重視している。それは何らかの尺度とか
度合いによる操作的な基準のなかに固定化されることのない概念であるという (H. G.
Blumer, *Op. Cit.*, 1969, pp. 147-148.)。

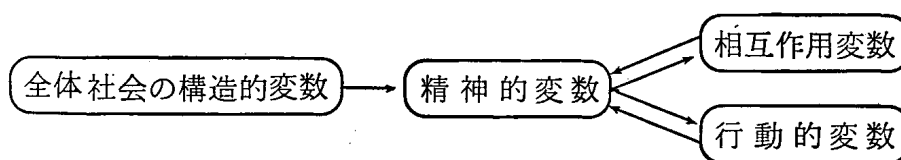
62) W. R. Burr et al., *Op. Cit.*, in Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, pp. 42-111.

63) セイリエンス (salience) とは、一定の状況において特定の事象 (あるいは集団など)
が個人の意識のなかで有している力の度合いのことである (H.H. Kelley, "Salience of
Membership and Resistance to Change of Group-anchored Attitude," *Human Re-
lations*, Vol. 8, 1955, pp. 275-289.)。

これは心のなかで生じるものが緊密な相互作用において生起しているものの機能であると仮定しているからにはほかならない。

さらに、このアプローチでは社会的状況における一般化された状態についての人びとの認知にたいしても注目を払っている。「意味ある他者」(significant others) や「一般化された他者」といった概念は、これらの社会的な準拠関係に関連するものである。また、このアプローチでは社会的地位や規範や、個人の心のなかに存在するものを説明する他の制度的変数などにも注目を払っている。

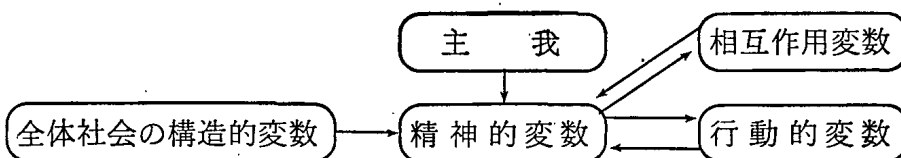
〔図3〕



しかしながら、このアプローチでは精神的変数の媒介的な規定という作用の認識なしに行動の説明変数として全体社会的変数を用いることはない。この点では、一般システム理論や構造・機能的分析の理論とは異なっている。

最後に、このアプローチでは自我の部分である主我が心のなかに生じるものに影響を及ぼすものと仮定しており、この主我の作用に大いに注目を払っている。このことは精神的変数における予測不可能な要素の存在を意味しており、図3と図4にみられる、とくに全体社会の構造的変数が決定的ないしは規範的な因果関係というよりも確率的 (stochastic) あるいは蓋然的 (probabilistic) な変数とみなされなければならないことを意味している。

〔図4〕



また、このアプローチでは一般システム理論のように、システムの一般法則を社会だけでなく人間のパーソナリティにもすべてに適用するものと仮定することはない。しかし、相互作用している人びとは当然のこととして生きていると仮定しているように、人間についてのシンボリックな相互作用はシステムのなかで生じているものと仮定している。

5. 家族研究における相互作用的アプローチの研究

さて、アメリカにおける家族研究に見いだされる相互作用的アプローチの展開をつぎに考察してみることにしてみたい。それには、まず家族研究の分野において相互作用的アプローチそれ自体を真正面から論じたいくらかの文献を紹介することからはじめてみたい。

アメリカの家族社会学の原点ともいえる文献である E. W. バージェスによる「相互作用する複数のパーソナリティの統合体としての家族」(1926年)という論文は、また疑いなく家族研究における相互作用的アプローチの原点でもあったといつてよい。⁶⁴⁾ バージェスは、この論文において次のように語っている。すなわち、1917年に大学の家族コースで講義をはじめたとき、確かに家族に関する多くの文献があった。しかし「現代家族を行動として、あるいは社会的現象として研究しようとした業績は、それがたとえその振りを装っただけの業績であったとしても皆無であった。それは自然科学のテーマとして研究されてはいなかったが、しかし法的制度としてのみ研究されてきていたのである。」⁶⁵⁾

そこでバージェスは、家族生活のケース・スタディ、民族学の業績、伝記や自伝、小説、演劇、社会的機関の記録、あるいはまた学生からの自分たちの家族についての事例報告を数百ケースほど手に入れ、それをもとに検討を

64) E. W. Burgess, "The Family as a Unity of Interacting Personalities," *The Family*, Vol. 7, (March 1926), pp. 3-9.

65) *Ibid.*, p. 3.

開始することにした。まずバージェスが発見したことは、家族の本質的特徴がいたるところで同じであるということであった。バージェスにとってそれは「自然的ならびに必然的に夫婦および親子の関係から生まれ、それらを維持するところの家族的感情 (familial sentiments)」であった。バージェスはこうした研究の結果、いわゆる「相互作用する複数のパーソナリティの統合体としての家族」という概念化を導いていくことになる。そして、「相互作用する複数のパーソナリティの統合体によって生活し、変化し、成育しつつあるものが意味されている。わたしはそれをスーパーパーソナリティと呼びたいところだった」と述べている。⁶⁶⁾

「とにかく、現実の家族生活の統合体は、いかなる制度的概念においてもなく、またいかなる公式的契約においてもなく、その成員の相互作用によってその存在を有しているのである。というのは家族は、その存続をその成員の調和的關係に依存しているわけではないし、またそれは必然的にその成員間の葛藤の結果として解体することにもならないからである。相互作用が行なわれているかぎり家族生活は生きつづけ、その相互作用が止まってしまったときにのみ、それは死に至るのである。」⁶⁷⁾

バージェスが家族研究において相互作用的アプローチを強調してからは、それがアメリカにおける家族研究にとってのとうぜんの前提となっていたといつてよい。そして事実、いくつかの具体的な家族研究がそれに続いたのである。

バージェス以来10年余りのちの1938年になって、W. ウォーラーが『家族—その力動的解釈—』という著書を公にし、その第1章において相互作用的アプローチの概念枠組を、当時としてはもっとも早く概説している。⁶⁸⁾ そし

66) この「スーパーパーソナリティ」(superpersonality) によってバージェスが観念していたことは、要するに、家族にも個人にとってのパーソナリティと同様のものが存在するということである。(E. W. Burgess, Op. Cit., 1926, p. 5.)

67) Ibid., p. 5.

68) Willard Waller, *The Family: A Dynamic Interpretation*, The Dryden Press, 1938.

て、当時としてはもっとも体系的な相互作用的アプローチ、それもシンボリック相互作用そのものに焦点をあてた相互作用的アプローチの概説が1959年にストライカーによって提示されている。⁶⁹⁾

ストライカーは、ここでは相互作用的アプローチの提起している主要な問題として、幼児や花嫁などにとっての「社会化の問題」と持続性のある行動パターンの組織化の問題としての「パーソナリティの問題」とを、まず提示している。そのあと、このアプローチの基本的仮定を4つ、そして主要な概念を18ほど提示し、例示的な説明を加えたうえで家族研究にとっての今後の示唆を行なっている。

つぎには、これまでも紹介したヒルとハンセンの1960年の論文がある。⁷⁰⁾これは家族研究における5つの概念枠組を確認するなかで相互作用的アプローチを第1に確認したものである。ヒルらは、ここでこのアプローチをミードやシカゴ学派のシンボリック相互作用論者たちの業績の直接的所産として位置づけ、その社会的時間と社会的空間の取扱い方、研究の単位やメカニズムなど、いくつかの基準にもとづく基本的概念の例示、研究対象としての家族の顕在的行動などを一覧表にして概説している。

1964年には、ストライカーがこれまでの文献をさらに乗り越えたかたちでいよいよ総合的ならびに体系的な相互作用的アプローチの概説を試みている。⁷¹⁾ストライカーは、ここではシンボリック相互作用論の社会学における発展過程から説き起こしている。以下に示した諸文献は、ストライカーがそこで挙げた例示的なアメリカにおける家族研究である。ここでは、その代表

69) Sheldon Stryker, "Symbolic Interaction as an Approach to Family Research," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, No. 2, 1959, pp. 111-119.

70) R. Hill and D. A. Hansen, "The Identification of Conceptual Frameworks Utilized in Family Study", *Marriage and Family Living*, Vol. 22, No. 4, 1960, pp. 299-311.

71) Sheldon Stryker, "The Interactional and Situational Approaches", in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

例のみを掲げておくことにしてみたい。

【ストライカーによる相互作用的家族研究の例示】

- 1938 R. C. Angell, *The Family Encounters the Depression*, Scribner.
- 1938 R. S. Cavan and K. H. Ranck, *The Family and the Depression*, University of Chicago Press.
- 1939 E. W. Burgess and L. S. Cottrell, *Predicting Success or Failure in Marriage*, Prentic-Hall.
- 1946 E. L. Koos, *Families in Trouble*, King's Crown Press.
- 1946 M. Komarovsky, "Cultural Contradictions and Sex Roles", *American Journal of Sociology*, Vol. 52, pp. 184-189.
- 1949 R. Hill, *Families Under Stress*, Harper.
- 1950 P. Wallin, "Cultural Contradictions and Sex Roles: A Repeat Study," *American Sociological Review*, Vol. 15, pp. 288-293.
- 1950 E. L. Koos, *The Middle-Class Family and its Problems*, Columbia University Press.
- 1952 Y. Lu, "Parental Role and Parent Child Relationship," *Marriage and Family Living*, Vol. 14, pp. 294-297.
- 1953 E. W. Burgess and P. Wallin, *Engagement and Marriage*, Lippincott.
- 1954 D. C. Carter, "The Influence of Family Relation and Family Experiences on Personality," *Marriage and Family Living*, Vol. 16, pp. 212-215.
- 1954 E. R. Mowrer, "Some Factors in the Affectional Adjustment of Twins," *American Sociological Review*, Vol. 19, pp. 468-471.
- 1954 P. Wallin, "Sex Differences in Attitudes to "In-Laws": A Test of a Theory," *American Journal of Sociology*, Vol. 59, pp. 466-469.
- 1954 C. Kirkpatrick and C. Hobart, "Disagreement, Disagreement Esti-

- mate and Non-Empathic Imputations for Intimacy Groups Varying from Favorite Date to Married”, *American Sociological Review*, Vol. 19, pp. 10-19.
- 1955 R. O. Blood, “A Retest of Waller’s Rating Complex”, *Marriage and Family Living*, Vol. 17, pp. 41-47.
- 1955 E. A. Smith, “Dating and Courtship at Pioneer College,” *Sociology and Social Research*, Vol. 40, pp. 92-98.
- 1955 N. N. Foote and L. S. Cattrell, *Identity and Personal Competence : A New Direction in Family Research*, University of Chicago Press.
- 1956 C. W. Hobert, “Disagreement and Non-Empathy during Courtship : A Restudy,” *Marriage and Family Living*, Vol. 18, 317-322.
- 1956 S. Stryker, “Relationships of Married Offspring and Parent : A Test of Mead’s Theory,” *American Journal of Sociology*, Vol. 62, pp. 308-319.
- 1957 G. M. Vernon and R. L. Stewart, “Empathy as a Process in the Dating Situation,” *American Sociological Review*, Vol. 7, pp. 48-52.
- 1958 O. G. Brim, “Family Structure and Sex Role Learning by Children : A Further Analysis of Helen Koch’s Date,” *Sociometry*, Vol. 2, pp. 1-16.
- 1959 J. V. Buerkle and R. F. Badgley, “Couple Role-taking : the Yale Interaction Battery,” *Marriage and Family Living*, Vol. 21, pp. 53-58.
- 1960 J. V. Buerkle, “Self-Attitudes and Marital Adjustment,” *Merrill-Palmer Quarterly*, Vol. 6, pp. 114-124.
- 1961 J. V. Buerkle et al., “Altruism, Role Conflict and Marital Adjust,” *Marriage and Family Living*, Vol. 23, pp. 20-26.
- 1962 I. Deutscher, “Socialization for Postparental Life,” in A. M. Rose

(ed.), *Human Behavior and Social Process*, Houghton Mifflin, pp. 506-525.

ところで1966年には、シュベインベルトが「家族研究における相互作用的枠組」と題する論文を発表している。⁷²⁾ シュベインベルトは、ここでは32の基本的概念と12の基本的仮定を概説している。この論文は、先のストライカーの論文(1964)を越えるものではなく、その焼直しに近いといってよいものである。

一方、1972年にはストライカーが家族の比較研究のための相互作用的アプローチを、これまでと同じ立脚点にたって概説している。⁷³⁾ このような過程を経て、現時点においてもっとも新しい相互作用的アプローチの概説であるバアらの論文が1979年に発表されることになったのである。⁷⁴⁾ バアらの論文については、すでに本稿の各所で紹介してきているとおりである。

さて、以上に見てきたように、すでにいくつかの文献がアメリカの家族研究における相互作用的アプローチについて論じてきているのであるが、それではこのアプローチにおける家族研究には一般的にいつてどのような特徴が指摘できるのであろうか。

まずヒルらの指摘を紹介してみることにしてみたい。⁷⁵⁾ ヒルらの指摘は、ほぼ次のとおりである。つまり第1に、(1)家族は相互作用する諸個人の統合体であると考えられているということである。そして、(2)その諸個人は、数多くの役割が配分されている家族内において一定の位置を占めており、同時

72) J. D. Schvaneveldt, "The Interactional Framework in the Study of the Family", in Nye and Berardo (eds.), *Op. Cit.*, 1966, pp. 97-129.

73) Sheldom Stryker, "Symbolic Interaction Theory: A Review and Some Suggestions for Comparative Family Research", *Journal of Comparative Family Studies*, Vol. 3, No. 1, pp. 17-32.

74) W. R. Burr et al., "Symbolic Interaction and the Family", in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. II, pp. 42-111.

75) R. Hill and D. A. Hansen, *Op. Cit.*, 1960, pp. 301-303.

に、(3)諸個人はその個人の属性や態度からして他の家族成員によって個別的あるいは集団的に支持された規範ないしは役割期待を認知していると考えられているのである。さらに(4)諸個人は、これらの役割期待を一定の状況において第一義的にそれらの源泉（すなわち準拠集団）や自分自身の自我概念（self-conception）にかんがみて規定することになり、そして(5)諸個人は、そのうえでそれぞれの役割演技をすることになると考えられているのである。ヒルらによれば、結局のところ家族は、このような構造における顕在的な相互行為、すなわち役割演技をする家族成員の相互作用の分析をとおして研究されることになるということである。

一般的な特徴の指摘をもう1つ紹介しておきたい。それはシュベインベルトの指摘である。⁷⁶⁾ シュベインベルトによれば、まず(1)相互作用的アプローチは、行動のコントロールが家族外の社会構造から導きだされるとは考えていないということ、すなわち社会的統制は、家族成員たちの相互の愛情と和合から由来するものと考えているということである。そして、(2)このアプローチは、家族成員による状況規定に焦点をおき、状況そのものではなく、相互作用する成員たちによって規定される状況規定に強調点を置いているということである。

また、(3)このアプローチは、家族の成員たちの行動に関心を払っており、とくにその行動が研究されつつある成員の役割を、家族成員がどのように規定するかという解釈のプロセスを把握したり、あるいはパターン化させたりすることに強調点を置いているということである。そして、(4)このアプローチは家族単位における組織化や変化は、行為単位の活動の産物であって、そのような行為単位を説明外におくような諸力によるものではないと考えているということである。さらに、(5)このアプローチでは顕在的行為に先行するシンボリックな意味や、あるいは解釈の過程を発見しようと努力していると

76) J.D. Schvaneveldt, Op. Cit., 1966, pp. 97-129.

ということである。そして、(6)このアプローチでは他の社会心理学的アプローチとは異なって、人為的にコントロールされた状況のもとでの実験というよりも、むしろ自然の観察や面接や質問紙法に焦点を置いているということである。

ここで、これまでのアメリカの家族研究における相互作用的アプローチの研究上の焦点をヒルとハンセンならびにシュベインベルトによる概説をもとに整理してみると、ほぼ次のようになるだろう。

【家族研究における相互作用的アプローチのこれまでの焦点】

ヒルとハンセンの整理	シュベインベルトの整理
(1) 家族内の役割分析	(1) 家族の内的相互作用
(2) 地位や地位相互間の関係の問題	(2) とくに注目を受けた焦点
(3) 権威のパターンや主導権の取得 にとって基礎となるもの	i) デート
i) コミュニケーションの過程	ii) 配偶者選択
ii) 葛藤	iii) 夫婦適応
iii) 問題解決	iv) 親子関係
iv) 意思決定	v) パーソナリティ形成
v) 緊張反応	
(4) その他の家族相互作用の側面 (デートから離婚までの相互作用的過程)	

6. 家族研究における相互作用的アプローチの発展

さて、アメリカの家族研究における相互作用的アプローチの代表的研究者をいくつか紹介しながら、つぎにそれぞれの理論的貢献を概観しておくことにしてみたい。

(1) E. W. バージェス

バーージェスについては、すでにいくつか考察してきたが、ここではバージ

ェスの強調する「相互作用する複数のパーソナリティの統合体としての家族」の意味について検討してみたい。⁷⁷⁾ まずバージェスの用いている「相互作用」の意味であるが、これは単に調和的な関係だけを意味して用いられてはいない。バージェスは、そこには葛藤、闘争、不和、緊張、不安などが包含されていることを前提にした概念として用いている。1926年発表のバージェスの論文に分析の加えられているマルクス家 (The Marx family) の事例は、このことを如実に表わしているだろう。

つぎにバージェスが用いている「複数のパーソナリティ」の意味であるが、これは複数の個体 (individuals) という意味ではなく、バージェス自身が指摘しているように、社会のなかで位置をもって生きており、その位置にもとづいて役割概念や自我意識を展開させている複数の個人 (persons) という意味での複数のパーソナリティである。ここでバージェスの用いているパーソナリティ概念が、すでにミードによって展開されてきていたパーソナリティ概念に近いオリエンテーションを有していたことが理解されるだろう。

最後に、バージェスの用いている「統合体としての家族」の意味であるが、バージェスはそれを次のように説明している。すなわち、当時、近く出版されることになっていた E. R. マウラーの著書『家族解体』 (E. R. Mowrer, *Family Disorganization*) において「家族は複数のパーソナリティの相互作用 (interplay) である」という定義に接し、バージェスはむしろ「家族は複数のパーソナリティの相互作用以上のものである」と自らが認識していることを確認し、独自の考えをもつに至ったというのである。バージェスによる独自の強調は、「この相互作用において家族はそれ自体の概念を展開させている」ということであり、そこから統合体としての家族とは、家族それ自体

77) E. W. Burgess, Op. Cit., 1926, pp. 3-9.

E. W. Burgess and H. J. Locke, *The Family from Institution to Companionship*, American Book Co., 1945, pp. 337-356.

による「家族それ自体の概念の展開」を意味するということになるのである。バージェスは、「人間性やパーソナリティや家族のような集団の研究にとって基本的な実体は、まさにこうした社会的イメージである」と強調しているのである。

シュベインベルトは、ヒルが1951年にウォーラーの著書の改訂版を公にするさいに、⁷⁸⁾ バージェスのこうした「複数のパーソナリティの統合体としての家族」という見方にたいして、それを「複数のパーソナリティの闘争の場 (arena) としての家族」という見方に切り換えたということを強調している。^{79), 80)} このように「闘争の場」としての家族に焦点をあてることは、たしかに統合体としての家族に焦点をあてていたのでは見いだせないあり方で家族の葛藤の出現や多様な速度で成長する子供たちや自分たちの内的な欲求を調和させつつある親たちを顕在化させることになるだろう。しかし、先にも述べてきたように、事実としてバージェスは葛藤や不和を無視してはいなかった。ただ統合体という概念の下位概念として葛藤や闘争や不和をどのように位置づけるかがバージェスにとっての重要な課題として残されたままだったといつてよいだろう。

78) W. Waller and R. Hill, *The Family: A Dynamic Interpretation* (Revised edition), The Dryden Press, 1951.

79) J. D. Schvaneveldt, *Op. Cit.*, 1966, p. 100.

80) アリーナ (arena) という用語は、ときに舞台を意味したり、観客の存在を予想させたりする。もし「闘争の場」としてでなく、こうした舞台や観客の存在を意味した内容の用語として解釈されてしまうと、それはもはや相互作用的アプローチとは異質のアプローチということになる。ハンセンとヒルは次のように述べている。すなわち、「真の意味において相互作用する複数のパーソナリティが家族であるのは、ただかれらが自分たちは家族だと考えているからである。」(D. A. Hansen and R. Hill, "Families Under Stress", in H. T. Christensen (ed.), *Handbook of Marriage and the Family*, Rand McNally, 1964, p. 802.) つまり、第三者による客観的な解説あるいは観察よりも家族成員たちによる主体的な状況規定の重視こそ相互作用的アプローチの真髓なのである。

ただし、あえて付記すると、ヒルが随所で用いているアリーナについては筆者としては「場裡」と訳すほうがより適当ではないかと内心、考えている。

バージェスにおける問題点の指摘は、ハンセンらの文献に見いだされる。⁸¹⁾ ハンセンらは、バージェスの公式化を最大限に評価しつつも、つぎのような問題点を指摘しているのである。すなわち、まず(1)バージェスにはパーソナリティに関する適当な理論の展開がなされてきていないこと、つぎに(2)ストレスのもとでの家族のダイナミクスという社会的領域における家族とパーソナリティとの関係についての研究の欠如していること、そして(3)家族成員の家族外的関係についての研究の欠如していることという3つの点である。

(2) W. ウォーラー

シンボリック相互作用の視点から家族を最初に、しかも完全なかたちで取り扱ったのはウォーラーであった。⁸²⁾ 例えば、ウォーラーは、相互作用が一定の社会的特徴をもっていることを指摘し、それを次の4つに整理している。すなわち、(1)相互作用の大きな変化は、とくに危機を経験することによって相互作用の過程において相互作用の構成要素のうちに生じる。(2)人間の行動の多くの原因は、人間自身のなかにある。(3)究極的な意味において社会は、心のなかで、そして想像のなかで存在する。(4)相互作用の構成要素は、相互の部分となって相互に浸透する (pp. 19-20)。以上である。

ところでウォーラーは、バージェスの「統合体としての家族」という見方に加えて J. ダラードの公式化による「所与の文化的環境のなかでそれぞれの歴史をもつ家族」⁸³⁾ という見方を補って研究することを提案している (p. 15)。ウォーラーによれば「家族の自然史 (natural history) は家族における相互作用の過程の研究にとって最善の可能性のあるオリエンテーションを用意するもの」であって、それは5つの段階 (stage) に区分されるという。すなわち、それは(1)人格形成期、(2)求婚期、(3)結婚初期、(4)親性期、(5)脱親性

81) D. A. Hansen and R. Hill, "Families Under Stress", in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 782-819.

82) Willard Waller, *The Family: A Dynamic Interpretation*, The Dryden Press, 1938.

83) John Dallard, "Needed Viewpoints in Family Research", *Social Forces*, Vol. 14 (October 1935), pp. 109-113.

期の五段階である。

ウォーラーは、この家族自然史の第2段階、すなわち求婚期に焦点をあてて、それが掛引き (bargaining) のプロセスであることを強調している。こうしたプロセスは、第3および第4の段階の夫婦関係にも見いだされ、「明白な搾取的態度」の存在として捉えている。デートに関しても権威ある他者とのデートをとおして権威を保つ関係としての競争関係と仮定し、いわゆる「格づけデートのコンプレックス」(rating-dating complex) という概念を提示しているのである (p. 275 および W. Waller, "The Rating and Dating Complex," *American Sociological Review*, Vol. 2 (October 1937), pp. 727-734.)。

バージェスの概念に関してのウォーラーの発展的修正は、この家族自然史という見方の補いだけではなく、かれはバージェスが家族をスーパーパーソナリティとして捉えようとしたことへの忠告を加えている。確かに家族をスーパーパーソナリティとして把握することは有用ではあるが、しかしそれを余まりにも類推化して考えると危険であるという。ウォーラーは、スーパーパーソナリティと言いきるよりも、むしろ家族は大なり小なり社会的相互作用の閉鎖的体系である傾向を有していると捉えたほうが良いと述べている。「かくして家族は部分的に閉鎖された因果関係の体系 (partially closed causal system) である」(p. 25) ということになる。⁸⁴⁾

ところで、このようにウォーラーが主張するとき、そこには相互作用的アプローチにおける弱点を補おうとする意図のあったことを看過すべきではないだろう。ウォーラーは言う。「社会にたいする家族の関係を理解するために、われわれは家族集団内の相互作用の具体的なプロセスを記述し、より大

84) R. H. ロジャースは、ウォーラーのこうした定義づけを前提にして、さらにそれを発展的に継承させて「半閉鎖的体系としての家族」(the family as a semi-closed system) という考え方を提示している。(R. H. Rodgers, "Toward a Theory of Family Development", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 26 (August 1964), pp. 262-270.)

きな社会で起こっているより大きな社会的プロセスにそれらに関係づけなければならぬ」(pp. 25-26) と。結局のところ、ウォーラーが家族を部分的に閉鎖された因果関係の体系というとき、それはそこに埋没するためというよりも、むしろそのことをとおして家族と社会との関係を明らかにするためであったのである。

ウォーラーについての問題点は、かれの著書『家族—その力動的解釈—』(1938年)が中間階層の家族生活を取り扱ったテキストとして提示されたのにもかかわらず、それはむしろかれ自身の調査研究において集められたデータから主として引きだされたウォーラー自身の独創的あるいは独善的な思索で満たされていたということにある。ヒルは、相互作用的アプローチの立場から本書の改訂に着手し、1951年に本書の改訂版をウォーラーとの共著というかたちで公にしている。⁸⁵⁾ ヒルは、そこでウォーラーの突飛とも思われる多くの行き過ぎを修正し、まず(1)洞察は、体系的に集められた証拠にもとづくべきこと、そして(2)証拠によって主張することのできないときは、事実と直面して主張を快く変更させる勇気を必要とすべきことの2点を明らかにしている。そしてヒルは、ウォーラーの家族自然史の五段階の考え方に関して、シンボリック相互作用論の立場からその各段階においてさまざまな家族成員が非同時的なかたちでそれぞれのライフ・サイクルにおける危機的課題に逢着するという事実の重要性を指摘し、そうすることによって家族研究における発達のアプローチの理論的方向づけをここで提示するという貢献をなしたのである。

(3) R. ヒル

ヒルは、アメリカにおける家族社会学者たちの一貫した関心の1つである「家族危機」(family crisis)に関して相互作用的アプローチによるもっとも体系的な研究を行ない、それを『ストレス下の家族』(1949年)として公に

85) W. Waller and R. Hill, *Op. Cit.*, 1951.

し、本書によってこの分野でのもっとも大きな貢献をなした人である。⁸⁶⁾ すなわち、かれはここで家族危機の一般理論の土台を築きあげたのである。

ヒルは、所与の出来ごとが家族危機を作り出すか、あるいは作りださないかは、少なくとも次の3つの変数に依存しているという。すなわち、まず〔A〕状況あるいは出来ごとそれ自体に含まれている困難さ、つぎに〔B〕家族の資源性、すなわちその家族の役割構造、柔軟性、危機にたいする経験など；そして〔C〕出来ごとが地位や目的や目標にとって脅威とみなされるかどうかという家族が出来ごとに与える状況規定という3つである。この危機発生要因としての3つの変数こそは、いわゆるヒルの家族危機〔X〕についての定理である「ABCX 方程式」にほかならない。⁸⁷⁾

ヒルは、ここでこの ABCX 方程式あるいは ABCX モデルに関して相互作用的アプローチの基本的仮定にもとづいて、言うまでもなく「状況規定」の要因〔C〕をもっとも重視している (pp. 50-97)。それまでのストレス下の家族に関する研究に比して、この〔C〕変数を最初に、しかも明確に位置づけて論じたのは、ヒルにほかならなかった。ヒルは言う。「観察者を当惑させることは、ほとんどの家族が少なくとも一時的にそうした大災難によって麻痺させられてしまうのに、いくらかの家族は洪水や災害の憂き目にも明白な解体もせず乗り越えていくということである。その鍵は、出来ごとの意味づけや状況規定に存するだろう。」⁸⁸⁾

ヒルは、こうした〔C〕変数に関連して危機を促進する出来ごと (crisis-precipitating events) についての3つの可能な規定がありうるとし、第1

86) Reuben Hill, *Families Under Stress*, Harper, 1949.

87) 家族危機に関しての ABCX モデルならびに家族ストレスの理論におけるアメリカ家族社会学のその後の発展は著しく、これまでにいくつかの研究が続いている。例えば、W. R. Burr, *Theory Construction and the Sociology of the Family*, Wiley, 1973. H. McCubbin and J. M. Patterson (eds.), *Systematic Assessment of Family Stress, Resources and Coping*, University of Minnesota Press, 1981.

88) Reuben Hill, "Generic Features of Families Under Stress", *Social Casework*, Vol. 39, No. 2-3, 1958, pp. 139-150.

に、(1)公平な観察者による客観的規定、第2に、(2)地域社会による文化的規定、そして第3に、(3)家族それ自体による主観的規定という3つを挙げている。⁸⁹⁾ そして言うまでもなく、第3の主観的規定をもっとも重視し、出来ごとは、家族の危機対応資源 (crisis-meeting resources) と、家族の状況規定との相互作用によってのみ家族危機という結果を作りだしていくことになるのであると説いている。

ヒルは、またハンセンとの共著論文において構造・機能的アプローチについて論じ、このアプローチでの家族危機の研究がこうした〔C〕要因を無視して、ストレスと結果的な家族行動との関係だけに意図的に焦点をおいていること、そして個人を基本的に社会体系の反応的部分としてのみ見なしていることを批判的に指摘している。⁹⁰⁾ ヒルがここで相互作用的アプローチの擁護者であることがはっきりと示されているものといつてよいだろう。

ヒルにたいする筆者なりの問題点の指摘をここでいくらか付け加えておくことにしてみたい。じつは1958年の論文において、ヒルは家族組織資源の欠陥 (deficiency) つまり〔B〕要因と、出来ごとの困難さに関する危機産出的規定 (negative definition) つまり〔C〕要因とを結合 (B+C) させて「家族不全性」(family inadequacy) という単一概念を案出し、家族危機産出諸要因の多角的車輪モデル (polygon wheel model) を提示している。⁹¹⁾ この作業は、ヒルによる〔C〕要因の重視とは裏腹に、むしろ〔C〕要因の曖昧化につながりかねない。ここで重要なことは、むしろ次のようなことではないだろうか。すなわち、(1)状況規定に作用する諸要因の分析——例えば、家族同一性にたいする家族成員の自我概念、つまり家族同一性のセイリエンス、⁹²⁾ 意味ある他者の認知した期待、家族成員それぞれの価値観、信念、ニ

89) W. Waller and R. Hill, *Op. Cit.*, 1951, pp. 462-464.

90) D. A. Hansen and R. Hill, "Families Under Stress", in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 782-819.

91) Reuben Hill, *Op. Cit.*, *Social Casework*, Vol. 39, No. 2-3, 1958, pp. 139-150.

92) これにはストライカーの研究による「同一性セイリエンス」の理論が大いに参考にな

ーズなどの分析, そして(2)状況規定の内容の分析——例えば, 出来ごとの困難さにたいする評価方法の基準の確立,⁹³⁾ 出来ごとの意味づけの類型化, あるいは状況規定それ自体のメカニズムの析出など, である。

最近のアメリカ家族社会学における家族ストレス研究では, [B] 要因の内容についての精緻化とともに [C] 要因に関する精緻化もすすめられてきている。しかし, [B] 要因の精緻化に比して [C] 要因のそれは, いまだの観が強く, 取り扱われていても, ときに所与として, あるいは未知数として扱われがちで, それ自体の内容あるいは作用のメカニズムの研究は, どちらかという遅れているといつてよいだろう。⁹⁴⁾

(4) L. S. コットレル

コットレルも一貫して家族研究に相互作用的アプローチの採用を擁護してきた一人である。かれは初期の論文において結婚が役割への適応の問題にはかならず, 社会関係のシステムにおける所与の位置に適した習慣や態度に関しての組織化として知覚されると説明している。⁹⁵⁾ そして, 互恵的な期待が役割の統合的部分にはかならないとするコットレルは, 結婚という関係にとっては, とくに行動の互恵的な期待の意義を認めることが極めて重要であると強調している。

コットレルの研究の焦点は, このように主として夫婦適応に置かれ, かれの研究はアメリカ家族社会学におけるいくつかの理論的貢献をなしたのであ

るはずである。

Sheldon Stryker, "Identity Salience and Role Performance: The Relevance of Symbolic Interaction Theory for Family Research", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30, No. 4, 1968, pp. 558-564.

93) これには M. H. クーンらの開発した TST 法などが, パーソナリティの次元と家族の次元との差異はあるにしても, 大いに参考になるはずである。

M. H. Kuhn and T. S. McPartland, *Op. Cit.*, *American Sociological Review*, Vol. 19, No. 1, 1954, pp. 68-76.

94) D. A. Hansen and V. A. Johnson, "Rethinking Family Stress Theory: Definitional Aspects", in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. I, pp. 582-603.

95) L. S. Cottrell, Jr., "Roles and Marital Adjustment", *Publication of American Sociological Society*, Vol. 27, 1933, pp. 107-115.

る。コットレルによる「夫婦適応についての3つの命題」を紹介すると、次のとおりである。⁹⁶⁾ 第1に、(1)夫婦適応 (marital adjustment) は、結婚の当事者たちがかれら自身の初期の家族集団 (定位家族) において獲得した一定の関係の体系あるいは状況を反復行為しようとする過程である。換言すれば、結婚の当事者は、かれらが子供や青年の時期に展開させた習慣的役割を演じる傾向があるということである。第2に、(2)結婚の当事者たちが結婚に持ちこむ役割の種類は、かれらの結婚の性格や、あるいはかれらが達成する適応の度合いを決定することになる。そして第3に、(3)不適応結婚 (maladjusted marriage) とは、結婚状況において結婚の当事者たちが結婚に持ちこむ役割によって要求される関係の体系を提供することに失敗した結果である。以上である。

ところで、コットレルは多産であったり、少産であったりという多様な多産性 (fertility) の生じる原因についての社会心理学的側面について論じ、それが相互作用的アプローチによって首尾よく説明されることを強調している。⁹⁷⁾ つまり、かれはここでは感情移入的反応としての役割取得の研究の重要性を強調しているのである。コットレルは、また相互作用的アプローチの視点から、今日、社会心理学において無視されてはいるが、しかし今後の研究の展開を必要とする極めて重要な課題として、その感情移入的反応の研究、動機づけの研究、および状況の概念化の研究を挙げている。⁹⁸⁾ この「状況の概念化」については、分析の目的に役だつような方法によって状況を概念化すること、すなわち、すべての状況が特殊的ならびに個別的で、それぞれ異質なものであるとして状況の概念化の放棄がなされてはならないことを強調している。

96) Ibid., p. 109.

97) L. S. Cottrell, Jr., "Research in Causes of Variations in Fertility—Social Psychological Aspects", *American Sociological Review*, Vol. 2, 1937, pp. 678-685.

98) L. S. Cottrell, Jr., "Some Neglected Problems in Social Psychology", *American Sociological Review*, Vol. 15, 1950, pp. 705-712.

コットレルによる随所における感情移入的反応についての研究の重要性の強調は、⁹⁹⁾ その後になって多くの研究を触発し、結局のところクリステンセンが第二次世界大戦後の今日的情況を論じ、いみじくも指摘しているように、¹⁰⁰⁾ 「戦後の今日においては、感情移入、対人能力、家族内コミュニケーション、相互作用過程、家族意思決定における役割認知、などが調査研究の関心事となってきている」ということになるのである。

コットレルおよびその他の夫婦適応の研究に関しての批判は、M. F. ニンコフの論文に見いだされる。¹⁰¹⁾ ニンコフは、コットレルをはじめ1930年代後半の夫婦適応の予測に関する研究、例えば L. M. ターマンや E. W. バージェスおよびコットレル¹⁰²⁾などのそれについて、「今日の夫婦適性テストは、それらが所与の人物の適性だけを測定しているという理由で不適當である。必要とされることは一人の特性だけでなく、特性の組合わせ、つまり適合性 (compatibility) のテストである」といい、また「個人の特性の強調は、相互作用的な概念枠組によって作られた貢献、すなわち結婚における一方の配偶者の特性は、もう一方の特性に関係してのみ意味をもっているということを見無視している」と批判している。¹⁰³⁾ このことは、どちらかといえばコットレルがとくに重視してきたものであったとはいいながら、しかしニンコフの冷徹な指摘は、事実として正しいと言わなければならないだろう。

(5) その他の研究

以上の人びとの研究のほかには、すでにストライカーによって挙げられた

99) 感情移入的反応は、ミードによる役割取得のための基礎となるものであって、いわば役割取得の概念の操作化の方向をめざすものである。

100) H. T. Christensen, "Development of the Family Field of Study," in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 3-32.

101) M. F. Nimkoff, "Trends in Family Research," *American Journal of Sociology*, Vol. 53, No. 6, 1948, pp. 477-482.

102) L. M. Terman, *Psychological Factors in Marital Happiness*, McGraw Hill, 1938.
E. W. Burgess and L. S. Cottrell, Jr., *Predicting Success or Failure in Marriage*, Prentice-Hall, 1939.

103) M. F. Nimkoff, *Op. Cit.*, 1948, p. 478.

アメリカにおける相互作用的家庭研究の例示（本稿第5節 pp. 37-39）に示されているように数多くの研究が見いだされる。ここでは、それらとさらにシュベインベルトが挙げている例示的文献などを大まかに整理しながら、多少なりとも概観しておくことにしてみたい。

まず R. C. エインジェル, R. S. キャバン, および E. L. クーズらの研究が存在しているが,¹⁰⁴⁾ これらは危機状況における家族の研究に相互作用的アプローチを採用したもので、とくに家族が逆境のもとで機能しようと試みつつあるとき、その家族の安定性 (family stability) を評価しようとして観察、面接、統計的サンプル、およびケース・ヒストリーの技法をそれぞれ採用している。

つぎに1940年の M. コマロフスキーの研究があるが、この研究もやはり経済的脅威というストレスのもとでの家族の相互作用を解説している。¹⁰⁵⁾ そして、つぎに E. E. レマスタース, T. D. エリオット, および E. D. ダイヤーらの研究が見いだされるが,¹⁰⁶⁾ これらの3つの論文は、家族成員の死や誕生によるメンバーの消失ないしは追加の時点での家族内の相互作用や適応の過程を研究している。

つぎに、H. インガーソル, S. ストライカー, および W. C. ブロンソンほか、の研究が見いだされるが,¹⁰⁷⁾ これらは一代目の家族成員から次の世代へ

104) R. C. Angell, *The Family Encounters the Depression*, Scribner, 1936.

R. S. Cavan and K. H. Ranck, *The Family and the Depression*, University of Chicago Press, 1938.

E. L. Koos, *Families in Trouble*, King's Crown Press, 1946.

105) Mirra Komarovsky, *The Unemployed Man and His Family*, The Dryden Press, 1940.

106) E. E. LeMasters, "Parenthood as Crisis," *Marriage and Family Living*, Vol. 19 (November 1957), pp. 352-355.

T. D. Eliot, "Adjusting to the Death of a Loved One," presented at the Annual Meeting of the Groves Conference on Marriage and the Family, 1958.

E. D. Dyer, "Parenthood as Crisis: A Re-study," *Marriage and Family Living*, Vol. 25 (May 1963), pp. 109-113.

107) H. Ingersol, "Study of Transmission of Authority Patterns in the Family,"

の権威のパターンや情緒的きずなの伝達が相互作用的アプローチによってどのように研究されるかを提示したものである。そして、つぎに J. V. バークルほか、C. W. ホバートほか、および J. R. ユードリーほか、の研究があるが、¹⁰⁸⁾ これらの論文は、夫婦の役割取得や夫婦の適応に関する研究にたいする相互作用的アプローチの有用性を実証したものである。

つぎに R. ミドルトンほか、A. J. ヴィディッチ、W. F. ケンケルほか、および J. D. フォークマンらの研究があるが、¹⁰⁹⁾ これらの論文は親子の相互作用ならびに夫と妻の相互評価および反応、あるいは相互作用に関して相互作用的アプローチの典型例を提示している。そして、H. S. サリバンや V. W. アイゼンスタインらは、相互作用的アプローチを利用して、治療的状况にその概念枠組を適用しようとしている。¹¹⁰⁾

Generic Psychology Monograph, Vol. 38 (March 1948), pp. 225-299.

S. Stryker, "Relationships of Married Offspring and Parent: A Test of Mead Theory," *American Journal of Sociology*, Vol. 62 (November 1956), pp. 308-319.

W. C. Bronson et al., "Patterns of Authority and Affection in Two Generations," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol. 58 (March 1959), pp. 143-152.

108) J. V. Burkle and R. F. Badgley, "Couple Role-taking: the Yale Marital Interaction Battery," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 53-58.

C. W. Hobart and J. Klausner, "Some Social Interactional Correlates of Marital Role Disagreement and Marital Adjustment," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 256-263.

J. R. Udry et al., "An Empirical Investigation of Some Widely Held Beliefs About Marital Interaction," *Marriage and Family Living*, Vol. 23, 1961, pp. 388-390.

109) R. Middleton and S. Putney, "Effect of Husband-Wife Interaction on the Strictness of Attitudes Toward Child Rearing," *Marriage and Family Living*, Vol. 22 (May 1960), pp. 171-173.

A. J. Vidich, "Methodological Problems in the Observation of Husband-Wife Interaction," *Marriage and Family Living*, Vol. 18 (August 1956), pp. 234-9.

W. F. Kenkel and D. K. Hoffman, "Real and Conceived Roles in Family Decision Making," *Marriage and Family Living*, Vol. 18 (November 1956), pp. 311-316.

J. D. Folkman, "Stressful and Supportive Familial Interaction," *Marriage and Family Living*, Vol. 18 (May 1956), pp. 102-106.

110) H. S. Sullivan, *Interpersonal Theory of Psychiatry*, W. W. Norton and Co., 1953.

V. W. Eisenstein, *Neurotic Interaction in Marriage*, J. B. Lippincott Co., 1953.

7. 結婚における満足と順応性に関する中範囲理論

—今日的段階での相互作用的アプローチの成果の一例示—

どちらかという、以上にみてきた相互作用的アプローチによる理論的貢献は、1960年代の中ごろまでの文献を中心にしてきた。このあと現在にいたっては、相互作用的アプローチによるアメリカ家族研究における理論的貢献は、ひじょうに多岐にわたり、かつ極めて高度な段階にいたっている。ここでは、そのすべての領域にわたっての紹介は、とうてい不可能である。そこで、せめて1つの領域でもと考えたのが、「結婚における満足と順応性」の領域である。今日、アメリカにおいて離婚が増大しており、わが国でもそれへの関心が高まってきているとき、この領域での相互作用的アプローチによるアメリカ家族研究の成果を紹介することは、極めて有意義なことといえてよいだろう。

ここに R. A. ルイスと G. B. スパニアの論文「結婚の質と安定性についての理論化」(1979年)がある。¹¹¹⁾ バアらも指摘しているように、¹¹²⁾ この論文は、これまでに公にされたこの領域でのさまざまな論文のなかでもっとも包括的な理論的展開を行なった論文であるといえてよい。そしてまた、この論文は、この領域でのこれまでの理論を要約したさまざまな既存の試みをさらに乗り越えて諸命題群の一般化を確認しようとした論文であるといえてよい。

しかしながら、この論文は、著者らのオリエンテーションからして必ずしもすべてが相互作用的アプローチの視点にたって展開されているとは言えない。とくに「結婚における満足や順応性」についての既存の諸命題群を著者らが帰納法によって一般化させていく「最終段階」においては、明らかに著

111) R. A. Lewis and G. B. Spanier, "Theorizing about the Quality and Stability of Marriage," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. I, pp. 268-294.

112) W. R. Burr et al., "Symbolic Interaction and the Family," in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. II, p. 66.

者らのオリエンテーションは「交換理論的アプローチ」の視点にたっているのである。バアらも指摘しているように、¹¹³⁾ この一般化の最終段階では、結局のところ肝腎な「なぜあることが報酬となり、あるいは損失となるのか」を有意義に説明しきれていないのである。

それは言うまでもなく、事象にたいして反応を作りだすところの学習された意味、価値、あるいは感情などが事象そのものにたいして肯定的ないしは否定的に付与せられるからであるが、これはもはや相互作用的アプローチの視点の導入なくして説明も、あるいはまた理解も不可能なのである。また著者らは、「結婚の質」(quality of marriage) あるいは「結婚の安定性」(stability of marriage) といった概念ないしは変数を用いて既存の諸命題群を意図的に整理しようとしている。これらの概念ないしは変数は、著者らの意図においては客観性あるいは科学性を高めるためのものであるかもしれないが、既存の命題を極めて曖昧な内容にさせてしまうおそれがあるといっただろう。例えば、著者らは「社会的階級が高ければ高いほど、結婚の質は高い」と述べているが、これでは何のことか理解に苦しむばかりである。

相互作用的アプローチからすれば、結婚における主体を重視するという意味から「結婚の質」よりも「結婚における満足」という変数を重視し、それを採用することになるだろう。そして、また同じく結婚における主体を重視するという意味から「結婚の安定性」よりも「結婚における順応性」あるいは「夫婦適応」という変数を重視し、それを採用することになるだろう。以下に紹介する中範囲理論としての諸命題群は、既存の個々ばらばらな諸命題群をルイスらのオリエンテーションにもとづいて整理されたものではあるが、しかしながら既存のそれらは、もともと大部分のものが相互作用的アプローチにもとづいて研究され、かつ理論化されたものばかりであるといっただろう。その意味において、一般化の最終段階におけるルイスらの提示しているいく

113) Ibid., p. 67.

らかの命題を除けば、それぞれの諸命題群は相互作用的アプローチによる理論的貢献であり、かつ今日的段階での相互作用的アプローチの成果の例示ということになる。

ここでは、結婚の質あるいは結婚の安定性というルイスらの用語を拒否し、また諸命題群の一般化の最終段階におけるルイスらによる意図的な交換理論的アプローチによる帰納法的整理を拒否したかたちでの諸命題群の例示を提示してみることにしてみたい。

まず「夫婦適応」に影響を及ぼす諸要因は、ほぼ次の3つに大きく分類されることになる。第1は「婚前諸要因」である。これは (1)同質婚 (homogamy), (2)諸資源, (3)モデルとしての両親, (4)意味ある他者からの支持, (5)その他の婚前諸要因といった要因群である。第2は「社会経済的諸要因」である。これは (1)社会経済的要因, (2)妻の就労, (3)世帯構成, (4)地域社会への包摂性 (community embeddedness) などといった要因群である。そして第3は「対人的諸要因」である。これは (1)肯定的評価 (positive regard), (2)情緒的満足, (3)コミュニケーション, (4)役割適合 (role fit), (5)相互作用などといった要因群である。

以下、これらの要因群ごとにそれぞれの諸命題を位置づけることになる。各要因群ごとには帰納法的にさらに一般化されたいくつかの命題が提示されている。それらの一般的命題にも注意を払う必要があるだろう。なお、それ以上の次の段階での帰納法的一般化ということになると、それはすでに本稿第3節 (pp. 20-25) に提示したバアらの「中範囲理論としての相互作用理論の諸命題群」ということになるだろう。事実、バアらのそれらは、こうした方向づけをもって提示されたものであった。

【婚前諸要因】

(1) 同質婚

〔命題1〕 異なった人種的背景出身の二人のほうが同じ人種的背景出身の二人よりも結婚における満足は低い。¹¹⁴⁾

〔命題2〕二人の社会経済的地位の相違が大きければ大きいほど、結婚における満足は低い。¹¹⁵⁾

〔命題3〕異なった宗教的教派に所属している二人のほうが同じ宗派に所属している二人よりも結婚における満足は低い。¹¹⁶⁾

〔命題4〕二人の知性における差異が大きければ大きいほど、結婚における満足は低い。¹¹⁷⁾

〔命題5〕二人の年齢における差異が大きければ大きいほど、結婚における満足は低い。¹¹⁸⁾

〔命題6〕夫と妻の地位における絶対的差異が大きければ大きいほど、結婚における満足は低い。¹¹⁹⁾

〔同質婚に関する一般的命題〕

婚前の二人に同質婚である度合いが高ければ高いほど、その結婚における満足は高い。

(2) 諸資源

〔命題1〕神経症的な行動の量が多ければ多いほど、結婚における満足は低い。¹²⁰⁾

〔命題2〕教育のレベルが高ければ高いほど、結婚における順応性は高い。¹²¹⁾

114) D. M. Heer, "The Prevalence of Black-White Marriage in the United States," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 36 (May 1974), pp. 246-258.

115) John Scanzoni, "A Social System Analysis of Dissolved and Existing Marriages," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30 (August 1968), pp. 452-461.

116) H. T. Christensen and K. Barber, "Interfaith versus Intrafaith Marriage in Indiana," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 29 (June 1967), pp. 461-469.

117) L. L. Bumpass and J. A. Sweet, "Differentials in Marital Instability: 1970," *American Sociological Review*, Vol. 37, 1972, pp. 754-766.

118) Ibid.

119) W. R. Burr, *Theory Construction and the Sociology of the Family*, Wiley, 1973, p. 111.

120) E. W. Burgess and P. Wallin, *Engagement and Marriage*, J. B. Lippincott, 1953.

121) Phillips Cutright, "Income and Family Events: Marital Stability," *Journal of*

- 〔命題3〕初婚年齢が高ければ高いほど、結婚における順応性は高い。¹²²⁾
- 〔命題4〕社会的階級が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹²³⁾
- 〔命題5〕結婚前に二人がよく知りあっていればいるほど、結婚における順応性は高い。¹²⁴⁾
- 〔命題6〕対人関係を操作する個人的技能のレベルが高ければ高いほど、結婚における順応性は高い。¹²⁵⁾
- 〔命題7〕個人が情緒的に健康であればあるほど、結婚における順応性は高い。¹²⁶⁾
- 〔命題8〕個人の自我概念が肯定的であればあるほど、結婚における順応性は高い。¹²⁷⁾
- 〔命題9〕配偶者が身体的に健康であればあるほど、結婚における満足は大

Marriage and the Family, Vol. 33 (April 1971), pp. 291-306.

122) L. L. Bumpass and J. A. Sweet, Op. Cit., 1972, pp. 754-766.

R. Schoen, California Divorce Rates by Age at First Marriage and Duration of First Marriage, *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 37, 1975, pp. 548-555.

J. T. Landis, "Social Correlates of Divorce or Nondivorce among the Unhappily Married," *Marriage and Family Living*, Vol. 25 (May 1963), pp. 178-180.

123) P. Cutright, Op. Cit., 1971, pp. 291-306.

J. T. Landis, Op. Cit., 1963, pp. 178-180.

124) E. W. Burgess and H. J. Locke, *The Family: From Institution to Companionship*, American Book Co., 1953.

Clifford Kirkpatrick, *The Family as Process and Institution*, 2nd ed., Ronald Press, 1963.

125) B. M. Crouse et al., "Conceptual Complexity and Marital Happiness," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30 (November 1968), pp. 643-646.

J. Buerkle and R. F. Badgley, Op. Cit., *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 53-58.

126) D. G. Dean, "Emotional Maturity and Marital Adjustment," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 28, 1966, pp. 454-457.

127) R. G. Tharp, "Psychological Patterning in Marriage," *Psychological Bulletin*, Vol. 60, 1963, pp. 97-117.

A. Aller, "Role of the Self-Concept in Student Marital Adjustment," *Family Life Coordinator*, Vol. 11 (April 1962), pp. 43-45.

J. Buerkle, "Self Attitudes and Marital Adjustment," *Merrill-Palmer Quarterly*, Vol. 6 (January 1960), pp. 114-123.

きい。¹²⁸⁾

〔諸資源に関する一般的命題〕

配偶者としての役割を果たすために習得された婚前における諸資源の量が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。

(3) モデルとしての両親

〔命題1〕 定位家族における両親の結婚における満足が高ければ高いほど、生殖家族における結婚への順応性は高い。

〔命題2〕 幼児期における幸福への度合いが高ければ高いほど、結婚における順応性は高い。

〔命題3〕 個人とその両親との関係が肯定的であればあるほど、結婚における順応性は高い。

〔モデルとしての両親に関する一般的命題〕

配偶者としての役割を果たすための役割モデルを観察する機会が多ければ多いほど、結婚における順応性は高い。

(4) 意味ある他者からの支持¹³⁰⁾

128) K. S. Renne, "Correlates of Dissatisfaction in Marriage," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 32 (January 1970), pp. 54-66.

R. G. Ballard, "The Interrelatedness of Alcoholism and Marital Conflict: 3. The Interaction between Marital Conflict and Alcoholism as Seen through MMPI's of Marriage Partners," *American Journal of Orthopsychiatry*, Vol. 29 (July 1959), pp. 528-546.

129) H. J. Locke, "Predicting Marital Adjustment by Comparing a Divorced and Happily Married Group," *American Sociological Review*, Vol. 12 (April 1947), pp. 187-191.

S. Stryker, Op. Cit., in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

G. Gurin et al., *Americans View Their Mental Health*, Basic Books, 1960.

130) J. E. Mayer, *Jewish-Gentile Courtship*, Free Press, 1961.

R. G. Ryder et al., "Separating and Jointing Influences in Courtship and Early Marriage," *American Journal of Orthopsychiatry*, Vol. 41 (April 1971), pp. 450-464.

R. Driscoll et al., "Parental Interference and Romantic Love: The Romeo and Juliet Effect," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 24, 1972, pp. 1-10.

R. A. Lewis, "Social Reaction and the Formation of Dyads: An Interactionist Approach to Mate Selection," *Sociometry*, Vol. 36, 1973, pp. 409-418.

〔命題1〕 両親によるその息子あるいは娘の配偶者たちにたいする承認が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。

〔命題2〕 個人が将来の姻戚になる人びと（義理の父，義理の母，義理の兄弟姉妹など）を好ましく思っていればいるほど、結婚における順応性は高い。

〔命題3〕 結婚にたいする友人たちの反対が大きければ大きいほど、結婚における満足は低い。

〔意味ある他者からの支持に関する一般的命題〕

二人にたいして意味ある他者の与える支持が大きければ大きいほど、その結婚における満足は高い。

(5) その他の婚前諸要因

〔命題1〕 慣習にたいしての尊重のレベルが進めば進むほど、結婚における満足は高い。¹³¹⁾

〔命題2〕 現代の価値体系と一致した婚前性行動を経験した個人のほうが現代の価値体系と一致しない婚前性行動を経験した個人よりも結婚における満足は大きい。¹³²⁾

〔命題3〕 婚前妊娠を経験した夫婦のほうが婚前妊娠を経験していない夫婦よりも結婚における満足が低い。¹³³⁾

〔命題4〕 結婚への動機づけが内的ないしは外的圧力を含んでの問題のある

131) W. R. Burr, *Op. Cit.*, Wiley, 1973, p. 113.

132) ルイスらは、この命題に関しては残念ながら最近の研究はないが、論理的帰結として提示されたとしている。(R. A. Lewis and G. B. Spanier, *Op. Cit.*, in W. R. Burr et al. (eds.), *Op. Cit.*, 1979, Vol. I, p. 278.)

133) S. H. Lowrie, "Early Marriage: Premarital Pregnancy and Associated Factors," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 27, 1965, pp. 48-56.

H. T. Christensen and H. H. Meissner, "Premarital Pregnancy as a Factor in Divorce," *American Sociological Review*, Vol. 18, 1953, pp. 641-644.

H. T. Christensen and B. Rubinstein, "Premarital Pregnancy and Divorce: A Follow-up Study by the Interview Method," *Marriage and Family Living*, Vol. 18, No. 2, 1956, pp. 114-123.

環境の影響力から独立している傾向が強ければ強いほど、満足は大きい。¹³⁴⁾

【社会経済的要因】

(1) 社会経済的要因

〔命題1〕夫の職業的地位が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹³⁵⁾

〔命題2〕両配偶者の経済的な資源と役割が安定していればいるほど、結婚における満足は高い。¹³⁶⁾

〔命題3〕家族の収入が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹³⁷⁾

〔社会経済的要因に関する一般的命題〕

家族の社会経済的な十全性 (adequacy) が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。

(2) 妻の就労

〔命題1〕妻がその就労に満足していればいるほど、結婚における満足は高い。¹³⁸⁾

134) W. R. Burr, *Op. Cit.*, Wiley, 1973.

135) R. C. Williamson, "Socio-economic Factors and Marital Adjustment in an Urban Setting," *American Sociological Review*, Vol. 19, 1954, pp. 13-16.

W. M. Kephart, "Occupational Level and Marital Disruption," *American Sociological Review*, Vol. 20, 1954, pp. 456-465.

T. P. Monahan, "Divorce by Occupational Level," *Marriage and Family Living*, Vol. 17, 1955, pp. 322-324.

W. J. Goode, *After Divorce*, Free Press, 1956.

136) R. F. Winch et al., "The Theory of Complementary Needs in Mate Selection: An Analytic and Descriptive Study," *American Sociological Review*, Vol. 19, 1954, pp. 241-249.

E. F. Frazier, "The Impact of Urban Civilization upon Nigro Family Life," in N. W. Bell and E. F. Vogel (eds.), *Modern Introduction to the Family*, Free press, 1960, pp. 101-111.

137) P. Cutright, "Income and Family Events: Marital Stability," *Op. Cit.*, Vol. 33 (April 1971), pp. 291-306.

W. J. Goode, "Marital Satisfaction and Instability: A Cross-cultural Analysis of Divorce Rates," *International Social Science Journal*, Vol. 14, 1962, pp. 507-526.

〔命題2〕妻の就労にたいする夫の承認が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹³⁹⁾

〔妻の就労に関する一般的命題〕

妻の就労にたいして両配偶者が満足していればいるほど、結婚における満足は高い。

(3) 世帯構成

〔命題1〕世帯において夫と妻以外の大人が少なければ少ないほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁰⁾

〔命題2〕夫婦が自分たちの希望で出産をコントロールすることが出来ればできるほど、結婚における満足は高い。¹⁴¹⁾

〔世帯構成に関する一般的命題〕

世帯構成が最適と知覚されればされるほど、結婚における満足は高い。

(4) 地域社会への包摂性

〔命題1〕友人たちや親戚による結婚の承認が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁴²⁾

-
- 138) M. Fogarty et al., *Sex, Career and Family*, George Allen. & Unwin, 1971.
S. R. Orden and N. M. Bradburn, "Dimensions of Marriage Happiness," *American Journal of Sociology*, Vol. 73, 1968, pp. 715-731.
- 139) L. J. Axelson, "The Marital Adjustment and Marital Role Definitions of Husbands of Working and Non-working Wives," *Journal of Marriage and Family Living*, Vol. 25 (May 1963), pp. 189-196.
F. I. Nye "Maternal Employment and Marital Interaction: Some Contingent Conditions," *Social Forces*, Vol. 40 (December 1961), pp. 113-119.
- 140) A. Clark and P. van Sommers, "Contradictory Demands in Family Relations and Adjustment to School and Home," *Human Relations*, Vol. 14, 1961, pp. 97-111.
E. M. Duvall, *In-laws: Pro and Con*, Association Press, 1954.
- 141) B. Farber and L. S. Blackman, "Marital Role Tensions and Number and Sex of Children," *American Sociological Review*, Vol. 21, 1956, pp. 596-601.
H. T. Christensen "Children in the Family: Relationship of Number and Spacing to Marital Success," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30, 1968, pp. 283-189.
- 142) C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

〔命題2〕夫婦の友人のネットワークが大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁴³⁾

〔命題3〕夫婦の地域社会への参加が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁴⁾

〔命題4〕同居者の人口密度が小さければ小さいほど、結婚における満足は大きい。¹⁴⁵⁾

〔地域社会への包摂性に関する一般的命題〕

夫婦の地域社会への包摂性が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。

【对人的諸要因】

(1) 肯定的評価

〔命題1〕配偶者間において知覚された類似性が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁶⁾

L. S. Bee, *Marriage and Family Relations*, Harper, 1959.

143) H. J. Locke and G. Karlsson, "Marital Adjustment and Prediction in Sweden and the U. S. A., *American Sociological Review*, Vol. 17, 1952, pp. 10-17.

C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

L. S. Bee, *Op. Cit.*, 1959.

144) E. W. Burgess and H. J. Looke, *Op. Cit.*, 1953.

C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

145) B. N. Adams, *The Family*, Rand McNally, 1975.

W. J. Goode, *World Revolution and Family Patterns*, Free Press, 1963.

146) E. L. Kelly, "Marital Compatibility as Related to Personality Traits of Husbands and Wives as Related by Self and Spouse," *Journal of Social Psychology*, Vol. 13, 1941, pp. 193-198.

E. B. Luckey, "Marital Satisfaction and its Association with Congruency of Perception," *Marriage and Family Living*, Vol. 22, 1960, pp. 49-54.

E. B. Luckey, "Perceptual Congruence of Self and Family Concepts as Marital Interaction," *Sociometry*, Vol. 24, 1961, pp. 234-250.

D. Byrne and B. Blaylock, "Similarity and Assumed Similarity in Marriage," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol. 67, 1963, pp. 636-640.

R. H. Coombs, "Value Consensus and Partner Satisfaction among Dating Couples," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 28, 1966, pp. 166-173.

B. I. Murstein, "Empirical Tests of Role, Complementary Needs, and Homogamy

〔命題2〕配偶者間におけるコミュニケーションが容易であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁷⁾

〔命題3〕配偶者間において他方について知覚された身体的、精神的、および性的魅力が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁸⁾

〔命題4〕配偶者間において他方についての評価が肯定的であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁴⁹⁾

〔命題5〕価値における合意があればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁰⁾

Theories of Marital Choice," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 29, 1967, pp. 689-696.

Jan Trost, "Some Data on Mate-selection: Homogamy and Perceived Homogamy," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 29, 1967, pp. 739-755.

147) R. A. Lewis, "Empathy in the Dating Dyad: A Retesting of Earlier Theory," Paper delivered at the Annual Meetings of the National Council on Family Relations, San Francisco, August 1967.

R. H. Coombs, *Op. Cit.*, 1966, pp. 166-173.

148) C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

C. Kirkpatrick and J. Cotten, "Physical Attractiveness, Age and Marital Adjustment," *American Sociological Review*, Vol. 16, 1951, pp. 81-86.

B. I. Murstein, "Stimulus-value Role: A Theory of Marital Choice," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 32, 1970, pp. 465-481.

D. J. Jackson and T. L. Huston, "Psychological Attraction and Assertiveness," *Journal of Social Psychology*, Vol. 47, 1975, pp. 79-85.

E. Berscheid and E. Walster, "Physical Attractiveness," in L. Berkowitz (ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 7, Academic Press, 1976.

149) E. B. Luckey, "Marital Satisfaction and Personality Correlates of Spouse," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 26, 1964, pp. 217-220.

B. I. Murstein and V. Glaudin, "The Relationship of Marital Adjustment to Personality: A Factor Analysis of the Interpersonal Check List," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30, 1968, pp. 651-655.

150) B. Farber and J. McHale, "Marital Integration and Parents' Agreement on Satisfaction with their Child's Behavior," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 65-69.

J. A. Schellenberg, "Homogamy in Personal Values and the Field of Eligibles," *Social Forces*, Vol. 39, 1960, pp. 157-162.

A. Kerckhoff and K. Davis, "Value Consensus and Need Complementarity in Mate Selection," *American Sociological Review*, Vol. 27, 1962, pp. 295-303.

〔命題6〕配偶者間において他方による自己の存在意義の確認が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁵¹⁾

〔肯定的評価に関しての一般的命題〕

配偶者間における評価が肯定的であればあるほど、結婚における満足は高い。

(2) 情緒的満足

〔命題1〕愛情表現が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁵²⁾

〔命題2〕配偶者間における尊敬の度合いが高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁵³⁾

〔命題3〕両配偶者の社会情諸的な役割遂行が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁴⁾

〔命題4〕両配偶者が相互にお互いの個人的成長の励ましを促せば促すほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁵⁾

151) R. A. Lewis, "A Longitudinal Test of a Developmental Framework for Premarital Dyadic Formation," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 35, 1973, pp. 16-25.

152) H. J. Locke, *Predicting Adjustment in Marriage: A Comparison of a Divorced and a Happily Married Group*, Holt, 1951.

C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

P. C. Pineo, "Disenchantment in the Later Years of Marriage," *Marriage and Family Living*, Vol. 23, 1961, pp. 3-11.

George Levinger, "Marital Cohesiveness and Dissolution: An Integrative Review," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 27, 1965, pp. 19-28.

153) C. M. Holstein et al., "The Importance of Expressive Behaviors, Sex, and Need-approval in Inducing Liking," *Journal of Experimental Social Psychology*, Vol. 7, 1971, pp. 534-544.

E. Walster, "The Effect of Self-esteem on Romantic Linking," *Ibid.*, Vol. 1, 1965, pp. 184-197.

154) S. L. Kotlar, "Instrumental and Expressive Marital Roles," *Sociology and Social Research*, Vol. 46, 1962, pp. 186-194.

G. Levinger, "Task and Social Behavior in Marriage," *Sociometry*, Vol. 27, 1964, pp. 433-448.

155) R. A. Dentler and P. Pineo, "Sexual Adjustment, Marital Adjustment, and Personal Growth of Husbands: A Panel Analysis," *Marriage and Family Living*,

〔命題5〕結婚が平等主義であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁶⁾

〔命題6〕夫婦としての境界維持が明確であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁷⁾

〔命題7〕配偶者間の情緒的な相互依存が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁸⁾

〔命題8〕配偶者間の思いやりが大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁵⁹⁾

〔命題9〕性的満足が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁰⁾

〔命題10〕理想的な配偶者観と自分の配偶者についての現実観とのあいだの一致が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁶¹⁾

Vol. 22, 1960, pp. 45-48.

C. R. Rogers, *Becoming Partners: Marriage and Its Alternatives*, Delacorte Press, 1972.

156) G. Levinger, *Op. Cit.*, 1964, pp. 433-448.

H. T. Christensen, *Marriage Analysis*, Ronald, 1958.

157) R. Rapoport and R. Rapoport, "Work and Family in Contemporary Society," *American Sociological Review*, Vol. 30, 1965, pp. 381-394.

T. D. Kemper, "Third Party Penetration of Local Social Systems," *Sociometry*, Vol. 31, 1968, pp. 1-29.

R. A. Lewis "Social Reaction and the Formation of Dyads: An Interactionist Approach to Mate Selection," *Sociometry*, Vol. 36, 1973, pp. 409-418.

158) E. W. Burgess and H. J. Locke, *Op. Cit.* 1953.

P. C. Pineo, *Op. Cit.*, 1961, pp. 3-11.

159) G. Winter, *Love and Conflict*, Dolphin Books, 1958.

T. Reik, *The Need to Be Loved*, Bantam Books, 1963.

D. H. Knox, "Conceptions of Love at Three Developmental Levels," *Family Coordinator*, Vol. 19, 1970, pp. 151-157.

H. A. Otto (ed.), *Love Today: A New Exploration*, Dell, 1972.

160) J. T. Landis et al., "The Effects of First Pregnancy upon the Sexual Adjustment of 212 Couples," *American Sociological Review*, Vol. 15, 1950, pp. 766-772,

R. A. Dentler and P. Pineo, *Op. Cit.*, 1960, pp. 45-48.

A. Clark and P. Wallin, "Women's Sexual Responsiveness and the Duration and Quality of Their Marriage," *American Journal of Sociology*, Vol. 71, 1965, pp. 187-196.

G. Levinger, *Op. Cit.*, 1965, pp. 19-28.

161) E. B. Luckey, *Op. Cit.*, 1960, pp. 49-54.

〔命題11〕 配偶者間の夫婦同一性が強ければ強いほど、結婚における満足は高い。¹⁶²⁾

〔情緒的満足に関する一般的命題〕

配偶者間における情緒的満足が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。

(3) コミュニケーション

〔命題1〕 配偶者間における自己開放性 (self-disclosure) が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁶³⁾

〔命題2〕 期待に関しての違反の分有意識が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁴⁾

〔命題3〕 非言語的コミュニケーションが明確であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁵⁾

〔命題4〕 配偶者間におけるシンボリックな環境 (意味づけ) が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁶⁾

E. B. Luckey, *Op. Cit.*, 1961, pp. 234-250.

J. L. Hawkins and K. Johnsen, "Perception of Behavioral Conformity, Imputation of Consensus, and Marital Satisfaction," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30, 1968, pp. 647-650.

162) W. Waller and R. Hill, *Op. Cit.*, The Dryden Press, 1951..

R. A. Lewis, "A Developmental Framework for the Analysis of Premarital Dyadic Formation," *Family Process*, Vol. 11, 1972, pp. 17-48.

163) G. Levinger and D. J. Senn, "Disclosure of Feelings in Marriage," *Merrill-Palmer Quarterly*, Vol. 13, 1967, pp. 237-249.

A. B. Taylor, "Role Perception, Empathy, and Marriage Adjustment," *Sociological and Social Research*, Vol. 52, 1967, pp. 22-34.

164) B. R. Cutter and W. G. Dyer, "Initial Adjustment Processes in Young Married Couples," *Social Forces*, Vol. 44, 1965, pp. 195-201.

165) L. Navran, "Communication and Adjustment in Marriage," *Family Process*, Vol. 6, 1967, pp. 173-184.

M. D. Kahn, "Non-verbal Communication and Marital Satisfaction," *Family Process*, Vol. 9, 1970, pp. 449-456.

166) Jan Trost, "Mate Selection, Marital Adjustment, and Symbolic Environment," *Acta Sociologica*, Vol. 8, 1964, pp. 27-35.

〔命題5〕 満足のいくコミュニケーションの頻度が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁷⁾

〔命題6〕 両配偶者による役割取得が明確であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁸⁾

〔命題7〕 役割知覚 (role perception) の一致の度合いが高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁶⁹⁾

〔命題8〕 配偶者間における理解度が高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁰⁾

〔命題9〕 感情移入が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁷¹⁾

〔コミュニケーションに関する一般的命題〕

配偶者間におけるコミュニケーションが効果的であればあるほど、結婚における満足は高い。

(4) 役割適合

〔命題1〕 ニードの補足性が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁷²⁾

167) C. W. Hobart and W. J. Klausner, "Some Social Interaction Correlates of Marital Role Disagreements and Marital Adjustment," *Marriage and Family Living*, Vol. 21, 1959, pp. 256-263.

L. Navran, *Op. Cit.*, 1967, pp. 173-184.

168) W. H. Clements, "Marital Interaction and Marital Stability," *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 29, 1967, pp. 697-702.

R. A. Lewis, *Op. Cit.*, *Sociometry*, Vol. 36, 1973, pp. 409-418.

169) R. G. Tharp, *Op. Cit.*, 1963, pp. 97-117.

S. L. Kotlar, "Middle-class Marital Role Expectation and Marital Adjustment," *Sociology and Social Research*, Vol. 49, 1965, pp. 183-193.

170) C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

171) N. N. Foote and L. S. Cottrell Jr., *Identity and Interpersonal Competence: A New Direction in Family Research*, University of Chicago Press, 1955.

J. Buerkle and R. F. Badgley, *Op. Cit.*, 1959, pp. 53-58.

172) R. F. Winch et al., "The Theory of Complementary Needs in Mate Selection: An Analytic and Descriptive Study", *American Sociological Review*, Vol. 19, 1954, pp. 241-249.

〔命題2〕役割の補足性が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁷³⁾

〔命題3〕一方の配偶者の役割期待と他方の配偶者の役割遂行とのあいだの一致が大きければ大きいほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁴⁾

〔命題4〕パーソナリティ特性における類似性が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁵⁾

〔命題5〕役割分有 (role sharing) が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁶⁾

〔命題6〕性的適合 (sexual compatibility) の度合いが高ければ高いほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁷⁾

〔役割適合に関する一般的命題〕

役割適合の度合いが高ければ高いほど、結婚における満足は高い。

(5) 相互作用

〔命題1〕友愛性 (companionship) の度合いが高ければ高いほど、結婚に

173) R. S. Ort, "A Study of Role Conflict as Related to Happiness in Marriage", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol. 45, 1950, pp. 691-699.

C. J. Couch, "The Use of the Concept "Role" and Its Derivatives in a Study of Marriage", *Marriage and Family Living*, Vol. 20, 1958, pp. 353-357.

J. P. Spiegel, "The Resolution of Role Conflict within the Family", in N. Bell and E. Vogel (eds.), *Op. Cit.*, 1960, pp. 361-381.

B. I. Murstein, "Stimulus-value Role: A Theory of Marital Choice", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 32, 1970, pp. 465-481.

174) R. S. Ort, *Op. Cit.*, 1950, pp. 691-699.

A. R. Mangus, "Role Theory and Marriage Counseling", *Social Forces*, Vol. 35, 1957, pp. 202-209.

175) H. T. Christensen, *Marriage Analysis*, Ronald Press, 1958.

J. Pickford et al., "Similar or Related Personality Traits as a Factor in Marital Happiness", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 28, 1966, pp. 190-192.

176) E. F. Vogel, "The Marital Relationship of Parents of Emotionally Disturbed Children: Polarization and Isolation", *Psychiatry*, Vol. 23, 1960, pp. 1-12.

177) W. M. Kephart, "Some Variables in Cases of Reported Sexual Maladjustment", *Marriage and Family Living*, Vol. 16, 1954, pp. 241-243.

R. A. Dentler and P. Pineo, *Op. Cit.*, 1960, pp. 45-48.

A. Clark and P. Wallin, *Op. Cit.*, 1965, pp. 187-196.

おける満足は高い。¹⁷⁸⁾

〔命題2〕 分有される活動の量が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁷⁹⁾

〔命題3〕 夫婦のあいだの相互浸透の量が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁸⁰⁾

〔命題4〕 物理的な分離の度合いが小さければ小さいほど、結婚における満足は高い。¹⁸¹⁾

〔命題5〕 問題解決が効果的であればあるほど、結婚における満足は高い。¹⁸²⁾

〔命題6〕 夫婦同伴の教会出席の頻度が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。¹⁸³⁾

〔相互作用に関する一般的命題〕

相互作用の量が多ければ多いほど、結婚における満足は高い。

178) C. Kirkpatrick, *Op. Cit.*, 2nd ed., 1963.

R. O. Blood, Jr. and D. M. Wolfe, *Husbands and Wives: The Dynamics of Married Living*, Free Press, 1960.

G. Levinger, *Op. Cit.*, 1965, pp. 19-28.

J. L. Hawkins, *Op. Cit.*, 1969, pp. 507-511.

179) L. S. Bee, *Op. Cit.*, Harper, 1959.

B. Farber and J. McHale, *Op. Cit.*, 1959, pp. 65-69.

R. O. Blood, Jr. and D. M. Wolfe, *Op. Cit.*, 1960.

180) W. Waller and R. Hill, *Op. Cit.*, 1951.

I. Altman, "The Communication of Interpersonal Attitudes: An Ecological Approach", in T. L. Huston (ed.), *Foundations of Interpersonal Attraction*, Academic Press, 1974.

181) L. M. Terman, *Psychological Factors in Marital Happiness*, McGraw-Hill, 1938.

R. Hill, *Families Under Stress*, Harper, 1949.

E. F. Vogel, *Op. Cit.*, 1960, pp. 1-12.

182) L. S. Bee, *Op. Cit.*, 1959.

V. Mathews and C. Milanovich, "New Orientations on Marital Adjustment", *Marriage and Family Living*, Vol. 25, 1963, pp. 300-304.

183) H. J. Locke, *Op. Cit.*, Holt, 1951.

8. 家族研究における相互作用的アプローチの課題

アメリカの家族研究における相互作用的アプローチの一般的特徴ならびにその焦点については、すでに本稿においていくらか紹介しておいた。ヒルらの指摘にも、またシュベインベルトの指摘にも見いだされるように、これまでのアメリカ家族研究における相互作用的アプローチの焦点は、主として家族内の役割分析あるいは家族の内的相互作用にあった。ヒルらは、このことを相互作用的アプローチの有する弱点として指摘している。¹⁸⁴⁾ すなわち、相互作用的アプローチでは家族を相対的に閉鎖的な統合体と考えていることから、コミュニティや家族外における機能的集団との関係を軽視する傾向があるということである。またヒルらは、相互作用的アプローチのもう1つの弱点として、それが個々の家族や特定の家族群についての研究に限定されていて、家族生活にかかわる制度的ならびに文化的なパターンについてはそれを軽視する傾向があると述べている。¹⁸⁵⁾

そこで、つぎにストライカーの指摘などを参考にしながら、¹⁸⁶⁾ それらを適当にアレンジしつつ家族研究における相互作用的アプローチに関しての今後の課題について、ここでいくらか述べておくことにしてみたい。

今後の課題として、まず第1に指摘されることは、家族行動の主観的要素 (subjective components) を捉えるための適切な方法あるいは手段を積極的に開発していく必要があるということである。ストレス下にある家族の研究においても、こうしたことは、まずもって追究されることの必要な課題であるといってよい。もちろん、このことはただちに数量化された方法によって

184) R. Hill and D. A. Hansen, *Op. Cit.*, 1960, pp. 299-311.

185) *Ibid.*, p. 303.

186) Sheldon Stryker, "Symbolic Interaction as an Approach to Family Research", *Op. Cit.*, 1959, pp. 111-119.

Sheldon Stryker, "The Interactional and Situational Approach", in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 125-170.

把握されることの必要性を意味しているのではなく、まずは概念の操作化あるいは変数化が積極的にすすめられるべきであるということの意味しているのである。

第2の課題としては、相互作用的アプローチが家族を相対的に閉鎖的体系と見なしている結果から生じる問題の克服という課題である。これは家族と外体系との関係への積極的な取組みの課題にほかならない。この課題は、ほぼ次の2つの方向において研究を積み重ねることによって相互作用的アプローチの枠組のなかで解決されていくとあってよいだろう。すなわち第1に、家族役割と対外的役割との関係の研究である。これは、例えば、職場での中間管理職の地位における役割と家族内での父(夫)としての役割との相互関係の研究などである。第2は、外体系そのものが家族に与える影響の研究である。ストライカーも指摘するように、確かにこれらの研究は不足していることは事実であるが、だからといって、それが相互作用的アプローチが有する必然的特性であるとするのは誤りであるというべきだろう。¹⁸⁷⁾

第3の課題としては、家族研究への相互作用的アプローチにおいて家族生活にかかわる制度や文化の問題をどのように位置づけるかという課題である。ストライカーの指摘にもあるように、これは主として状況規定におけるその規定の共有性や安定性として考慮されるということになる。¹⁸⁸⁾ つまり、個々の家族における状況規定の共有性ないしは普遍性は、まさに制度であり、文化にほかならないということである。ストライカーの指摘にはないが、また個々の家族成員が家族における役割遂行において配慮することになるはずの「一般化された他者」の問題も、結局のところは制度や文化の問題として位置づけることができるだろう。

187) Sheldon Stryker *Op. Cit.*, in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, p. 162.

すでに述べたように、家族が部分的に閉鎖された体系であることをウォーラーが強調したのは、むしろ相互作用的アプローチの弱点を補おうとしたものであって、その逆ではなかったことを想起すべきである。(W. Waller, *Op. Cit.*, 1938, pp. 25-26.)

188) S. Stryker, *Op. Cit.*, in H. T. Christensen (ed.), *Op. Cit.*, 1964, p. 162.

第4の課題としては、家族同一性へのコミットメントの度合いについての研究をどのようにすすめるかという課題である。それには、まず第1に家族役割への同一化の強い人とそうでない人との相違、そしてそれに伴う親子関係にとっての、また夫婦関係にとっての、そして社会全体にとっての現象の相違についての研究の積み重ねが期待されるだろう。そして第2に、どのような種類の家族外の役割同一性が家族における役割同一性と一致するか、あるいは一致しないかについての研究の積み重ねが期待されるだろう。そして第3に、家族外の場合において家族的役割が表面化することを許容するものは何か、すなわちその決定要因についての研究の積み重ねが期待されるだろう。家族同一性へのコミットメントの研究は、このほかには離婚の予測の研究にとっても不可欠とあってよいだろう。

第5の課題としては、家族周期と役割取得の問題が挙げられるだろう。これは役割取得が適応的か、あるいは適応的でないかのもとになる条件は何かということ、つまり家族周期をとおしての個々の家族成員における役割取得の変移の問題ということである。そして、これはまた対人関係の能力である役割取得の能力や感情移入などの研究でもあるだろう。異なった価値観あるいは異なった準拠枠をもった夫婦の役割取得の研究も、ここでの重要な課題の1つに入ってくるというよい。

第6の課題としては、従来からもそれなりにある程度は研究が積み上げられてきてはいるが、今後のますますの積み上げを必要とする課題である。つまり、それは家族の役割関係や家族過程そのものをシンボリックな相互作用の過程として捉える研究の積み重ねである。例えば、家族成員による会話における状況規定や概念規定の過程あるいはその過程の相違の研究、ないしは第5の課題とも関連するが、家族ライフ・サイクルのもとでの状況規定にもとづく役割関係の変化（例えば、配偶者の死、出生、結婚、嫁姑関係、定年など）の研究が今後ともに大いに期待されるだろう。

第7の課題としては、家族同一性の変化に関する研究である。これは第4

の課題とも関連するものであるが、焦点はむしろ家族危機についての研究と
いったほうがよい。例えば、離婚、失業、不況、災害、交通事故、疾病、等
々である。家族同一性の変化は、家族の危機状況への適応において生じる可
能性がもっとも大きい。両者は、家族研究という点では不可分なのである。
しかしながら、だからといって、この可能性は必然的ではなく、変化しない
場合もあり、そこで同一性の安定性の問題も一方において研究される必要が
あるだろう。相互作用的アプローチの概念枠組からは、とくに「意味ある他
者」との関連性がここでは重要な視点として登場してくるだろう。

第8の課題としては、家族研究に生活史的パースペクティブを導入する
という課題である。これは今日、ライフコース・アプローチ (life-course ap-
proach) として家族研究の分野で注目されてきているもので、すでにいくつ
かの概念ないしは概念枠組も開拓されてきている。家族をそれぞれの家族成
員の人生経歴 (career) の同期発生 (synchronization) の場として捉え、そ
の家族的時間におけるそれぞれの家族成員の「人生時間表」 (career time-
table) の相互依存性と自律性が分析されることになる。¹⁸⁹⁾ この研究は、家
族研究における今後の相互作用的アプローチの発展を賭けた重大な課題とし
て位置づけられるとあってよいだろう。

第9の課題としては、家族研究における相互作用的アプローチそのものの
今後の課題を論じているこの場で論じるのは、いささか場ちがいかもしれな
いが、あえて述べると、家族研究にとって1つのアプローチだけで事足れり
と考えるのは適切でないということ、つまり相互作用的アプローチは家族研
究にとっての1つのアプローチであって必ずしも万能ではないということ
である。個人の行動の無意識的過程の意味は、精神分析的アプローチに学ぶと

189) T. K. Hareven (ed.), *Transitions: The Family and the Life Course in Historical Perspective*, Academic Press, 1978.

D. W. Plath, *Long Engagements: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press, 1980.

ころが大きいはずだし、家族全体を社会全体に位置づけて考察するのに構造・機能的アプローチから学ぶところは大きいはずである。

シンボリック相互作用論 (symbolic interactionism) の立場にある論者たちが構造・機能的分析の理論をハーヴァード・メカニストと呼んだり、統合モデルと批判したりして否定的姿勢を示し、自らの理論には「イズム」を語尾に付して、いわばその抗争モデルであることを主張しているかのようであるが、しかし、すでにストライカーは次のように指摘し、それが他のモデルとの自主的な連合モデルを志向していることを強調しているのである。¹⁹⁰⁾ すなわち「シンボリック相互作用の理論は、人間行動の一般理論ではなく、その説明にとって重要と思われる2、3の変数の選択であり、その意味で人間行動に接近することのできる他の理論的パースペクティブの貢献を否定するものではない」(p. 119) と。

またヒルは、つとに家族研究にとっての「障害」をいくつかにまとめ、「研究されることへの家族の抵抗」や「的確な調査用具の欠如」に次いで第3番目に、「概念的アプローチ間の競合の存在」を指摘しているのである。¹⁹¹⁾ そしてクリステンセンは、ヒルらの1960年の5つの概念枠組の類型化を評価しつつも、学生が教授から1つのアプローチだけを指導ならびに訓練される傾向にあり、他の概念枠組の文献を理解したり、評価したりできなくなることになりはしないかと述べている (pp. 23-24)。¹⁹²⁾

家族は、明らかに相互作用する複数のパーソナリティによって構成される集団である。と同時に、社会構造のなかの1つの単位であり、1つの社会制度としての歴史的な位置づけを有する存在である。これらのことを考え合わせ

190) Sheldon Stryker, "Symbolic Interaction as an Approach to Family Research", *Marriage and Family Living*, Vol. 21, No. 2, 1959, pp. 111-119.

191) Reuben Hill, "A Critique of Contemporary Marriage and Family Research", *Social Forces*, Vol. 33, 1955, pp. 268-277.

192) H. T. Christensen, "Development of Family Field of Study", in Christensen(ed.), *Op. Cit.*, 1964, pp. 3-32.

ると、1つのアプローチを強調するよりも、そのアプローチの有効性と限界性を知ることによって、むしろ複数の視点による「相互協力的アプローチ」(interframework approach)こそ今後ますます重視されなければならないということになるだろう。ここでは相互作用のアプローチの有効性のますますの洗練化とともに、その必然的限界を知ったうえでの「インターフレームワーク・アプローチ」の提唱を強調しておきたい。

ところで、今後の課題に関してのまとめの形として紹介しておきたい家族研究にとっての1つの重要な理論的志向がある。それはストライカーの研究による「同一性セイリエンス」(identity salience)の研究である。¹⁹³⁾ これまでに本節において指摘してきたいくつかの家族研究における相互作用のアプローチの今後の課題にとって、これはおそらくその他のものに比して理論的土台として今後、もっとも貢献度の高いものになるのではないかと予想されるものである。¹⁹⁴⁾

同一性セイリエンスの研究とは、ストライカーが家族研究における役割期待と役割遂行のあいだの論理的な橋渡しとしての媒介変数を明らかにし、一群の仮説を設定しようとしてはじまった研究である。セイリエンスとは、本稿の注63 (p. 32) において紹介しているように「一定の状況において特定の事象（あるいは集団など）が個人の意識のなかで有している力の度合い」のことである。ストライカーは、これが個人の意識のなかで一定の階統制的配置になっているものと考えて、役割期待と役割遂行のあいだの媒介変数としての「セイリエンス・ハイラーキー」(salience hierarchy) の重要性を問題にしたのである。

193) Sheldon Stryker, "Identity Salience and Role Performance: The Relevance of Symbolic Interaction Theory for Family Research", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 30, No. 4, 1968, pp. 558-568.

194) こうした判断の例は、例えば C.B. Broderick の論文にも見いだされる (p. 141)。C.B. Broderick, "Beyond the Five Conceptual Frameworks: A Decade of Development in Family Theory", *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 33, No. 1, 1971, pp. 139-159.

ストライカーがこのようなセイリエンス・ハイラーキーを問題にしていることは、結局のところ自我理論の予測力の改善、つまり自我概念の操作化を問題にしていることにほかならない。¹⁹⁵⁾ 個人のセイリエンス・ハイラーキーにおける同一性の位置づけを問題にすることによって、ストライカーは「一般化された他者」ならびに「意味ある他者」などによる役割期待とそれに対応する個人の役割遂行のあり方との関連性を明らかにすることができるものと考えているのである。

ストライカーによるここでの「同一性」の意味を紹介しておくと、それは「構造化された社会関係にある個人によって受入れられ、帰属させられた位置」のことで、ミードの概念の客我 (me) の内容に近似しているといつてよいものである。かくして「同一性セイリエンス」とは、けっきょく「さまざまな状況において、ある人にとって所与の同一性が呼びだ (invoke) される可能性」ということになり、自我を構成する明確な同一性は、セイリエンス・ハイラーキーのなかに存在し、位置づけられているものということになるのである。

ストライカーは、まず第1にセイリエンス・ハイラーキーにおける所与の同一性の位置を説明する仮説の確立、そして第2に、同一性セイリエンスと役割遂行とを結びつける仮説の確立をそれぞれ目ざして研究を重ね、今後の検証の期待されるものとして一連の仮説群の設定を試みたのである。以下は、そうして出来あがったストライカーによる仮説群である。これらは先ほど指摘した今後の研究課題のそれぞれをもう一度見直してみれば、すぐに明らかになるように、それぞれの課題の基礎として極めて重要なものばかりである。その意味では今後の研究課題は、逆に以下の仮説群の検証という形ですすめ

195) ストライカーは、「自我 (self) が分化した同一性 (differentiated identities) から構成されており、これらの分化した同一性がセイリエンス・ハイラーキーのうちに存在しているということの認識が肝要である」(p. 561) と述べている。(S. Stryker, Op. Cit., 1968, pp. 558-568.)

ることも可能であるということになるかもしれない。なお、以下の仮説に用いられている「同一性」は、家族研究という視点からは「家族における役割同一性」として理解しておくと分かりやすいだろう。

【同一性セイリエンスに関する仮説群】

〔仮説1〕同一性の前提であるコミットメントが大きければ大きいほど、すなわち所与の同一性のもとに人が入り込む関係のネットワークが広範囲で、そしてあるいは強度であればあるほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説1A〕同一性の前提であるコミットメントが大きければ大きいほど、その同一性は肯定的なカセクシス反応による投与が多い。そして所与の同一性にとって肯定的なカセクシス反応による投与が多ければ多いほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説1B〕同一性の前提であるコミットメントが大きければ大きいほど、その同一性はその人の必要にとっての手段として認知されることが多い。そして所与の同一性が必要にとって手段として認知されればされるほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説2〕所与のコミットメントのネットワークがそのネットワークに入り込む可能性のある他の同一性にたいして特定の同一性を前提にすることが多ければ多いほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説3〕ある人が所与の同一性のもとにコミットされている人びとの役割期待に一致することが多ければ多いほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説4〕所与の同一性の前提であるコミットメントのネットワークに含まれている人びとで、その同一性がかれら自身のセイリエンス・ハイラーキーにおいて高い人びとの数が多ければ多いほど、セイリエンス・ハイラーキーにおけるその同一性は高い。

〔仮説5〕 セイリエンス・ハイラーキーにおいて同一性が高ければ高いほど、その同一性にともなった役割期待と一致した役割遂行の可能性は高い。

〔仮説6〕 セイリエンス・ハイラーキーにおいて同一性が高ければ高いほど、人はその状況をその同一性によって遂行する機会として認知する可能性が高い。

〔仮説7〕 セイリエンス・ハイラーキーにおいて同一性が高ければ高いほど、人はその同一性によって遂行する機会を探し求める可能性が高い。

〔仮説8〕 いま在るコミットメントを切り離すような外的出来ごとは、新しい同一性の採用を容易にする。

〔仮説9〕 企図された同一性の変化についての認知された結果が価値づけされたコミットメントをより多く強化する方向にあればあるほど、その変化にたいする抵抗は小さい。逆にいえば、企図された同一性の変化についての認知された結果が価値づけされたコミットメントを減ずるような方向にあればあるほど、その変化への抵抗は大きい。

(1983年3月20日脱稿)

〔付記〕

本稿の一部は、第15回家族社会学セミナー（1982年7月24日・於神戸市舞子ビラ）において報告したものに基づいている。